教科適用 徒然草

095835-000-1

15-296

徒然草（教科適用）

長田　致孝／訂

M27

DBR-0042

袁氏畫圃 法然草 全

門類 冊

栗田寛先生校閲　長田致孝訂正

教科適用 徒然草

東京書林　青山清吉藏版

●高等尋常中學校師範學校及女學校國史國文教科書并參考書

◎文部省檢定濟

○大學教授内藤耻叟校閲
○佐伯有義
○三木五百枝校正標註

校正 **標註神皇正統記**

和装半紙本 全一冊 定價三十五錢 郵税四錢

この書は北畠親房の著はれし書にて古へは日本の春秋なりとてもてはや殊に世に行はれたりその論の正しきは云ふも更なり古書さものの内は格別正しきは之にすぐれたるもの稀なり其外にも此度度會氏の秘本に校合し衍脱は補ひまた異本にて校合し標註を加へたれは上は村上天皇まで史論の一目にも明瞭なることを得ん國史國文に志ある人之を見ずして何をか見ん

○文學博士黒川眞頼校閲
○鈴木弘恭訂正増補

訂正増補 **つれ〲草文段抄**

和装半紙本 全三冊 上 定價二十五錢 中 同 二十五錢 下 同 三十錢 郵税各四錢づゝ

本書は兼好法師の著にして文章の流暢意義の高尚なるは云ふも更なり古へは本邦の論語とまでいひもてはやされたり其文は約にして其旨深く故に古人の註釋も三十餘種の多きにいたれど其意を得たるもの見ず中に北村季吟の文段抄は簡にして能く其旨を得たりと雖も未だ盡さゞる所あれは鈴木弘恭大人之を補ひ徒然草文段抄なる者を發行せり世の人徒然草を讀まんものは此書によらずして何によるべき實に本書は國文に志あるもの〻一讀せざるべからざる良書なり

○栗田寛校閲
○長田致孝訂正

教科適用 **つれ〲草**

和装半紙本 定價廿五錢 全壹冊 郵税二錢

本書は國文教科書及び修身教科書にあつる目的を以て編纂せしものにて徒然草の内偽説あるひは猥褻にかゝる部分はことごとくぬきさり一の完

全無缺なる教科に適用の書となせり尋常中學校尋常師範學校高等女學校の教科書には最も適當なる良書なり

○文學博士黒川眞頼校閲
○鈴木弘恭訂正増補

訂正増補 **枕草紙春曙抄**

和装半紙本 全三冊 上 定價三十錢 中 同 三十錢 下 同 三十錢 郵税各四錢づゝ

生あるもの〻なくてはかなはぬもの〻は水なり、然れ共徒然草の心は清少納言の才智にも冠たるを、こゝに此書は何の用ありや、とも思ふにあらず、さればこそ古人も此抄をもて稱揚し、讀むものは皆その注釋を賞しぬ、鈴木弘恭大人此の春曙抄に北村季吟の注を本として校合し、川黒眞頼大人の校閲を經て訂正増補せられたり、句讀の所を明らかにし文字の誤りを正し、天文五年の古本と校合して萬世の讀者に便ならしむ、世の人々此書によりて枕草紙の眞意を知らんと欲せば此抄を讀まずんばあるべからず

○文學博士小中村清矩
○中村秋香 編輯

増訂日用文鑑

和装半紙本 上 定價二十五錢 下 同 二十五錢 全二冊 郵税各四錢づゝ

本書は曩に發行し中學校師範學校其他高等學校の教科書に用ひられしが文運の隆盛なるにしたがひ更に増補訂正してこたび發行せり中學校の教科書には最も適當なる良書なり

○小中村清矩
○中村秋香 合著

増訂日用文鑑參考書

和装半紙本全一冊 定價三十錢 郵税二錢

本書中難解あるひは言語の解しがたきをば抄出して之に最も委しく注釋せるものにて日用文鑑の案内とも云ふべき書なり教師及生徒の參考書には此上もなき良書なり

○文學博士黑川眞頼校閲
○鈴木弘恭著

新撰 **日本文學史畧**

洋裝美本 定價四十錢 全一冊 郵稅八錢

本書は鈴木論の所々の學校にて講述せられしを集めて一卷とはなしたるなり神代より光格天皇までの文學を第一紀元前の文學第二紀元後の文學第三奈良朝前の文學第四奈良朝の文學第五平安朝の文學第六延喜天暦朝の文學第七寛和以後の文學第八鎌倉時代の文學第九足利時代の文學第十慶長後の文學てふ如く序を追ひ類を分ちていとつまびらかにせられたり斯の道に志ある者一度此書を開かは國文の變遷より家々の文派まで嘆々たることを得ん請ふ愛顧を賜へ

今泉定介先生 畠山健先生 校正

百家說林 前後集 全二帙

本書の特色(第一)格言と傳記と多きが故に修身科の參考書として最適當なること(第二)家屋構造の沿革及衣服器具等に關せる事は精密なる國史を博入したれば歴史科の參考書に缺くべからざる事(第三)普通國文の摸範となるべきものは大抵この書に網羅せり故に作文科の參考書に必用なる事……これ殊に世間の好評を博し發賣の數まことに數千部の多きに達せる所以ならん今や文部大臣は大に普通教育の國文を奬勵せざる而して其の經營なる事なるを知り給はんことを……選擇の文は殆こゝに盡くせり乞ふ江湖の諸彦幸に一本を購ひて其の經營ならざるを知り給はんことを

前集目次

一 獨語 太春菅原道眞 / 雅のすさび 宰相中將 / 北邊隨筆 富士谷成章 / 御杖 奈留別志 賀茂眞淵
二 雨窓閑話 不著撰者 / 山鄙の手ぶり 石川雅望 / かたびさし 齋藤彦麿 / 北里十二時 石川雅望
三 玄同放言 上下集 曲亭馬琴 / 放言集 本居宣長 / 菅庵隨筆 朝倉孝景 / 奥のほそ道 芭蕉翁
四 尾花かゝみ 宣長門人 / 圓珠庵雜記 僧契沖 / 侶名世說 南太川眞淵 / 翻のあき風 賀茂眞淵 / 馬場浸錄 青山定雄 / 孫惠浸錄 松平定信 / 雜說 松平定信
五 鎖屑 谷川士清 / 蜘蛛の糸巻 岩瀬京山 / しりうこと 小説家主人 / 春波樓筆記 司馬江漢 / 雜後百話 不著撰者

後集目次

六 椿園雜書 三浦貞山 / 埴生雜考 安藤信正 / 家屋雜考 澤田名垂 / 朝寢漫筆 太田南畝
七 兎園小說 自一集至五集 山崎美成 / 自六集至十集 屋代弘賢 / 小かれ草 石川雅望 / 瞿麥 柳亭種彦 / 閑窓自語 大田南畝 / 韓昜 元木網 / 人名考 新井白石 / 大海のはし 宮崎成斐
八 鳥おどし 川崎孫三郎 / 兎園小說 自一集至五集 山崎美成 / 百鬼夜行 山東京傳 / 我宿草 太田道灌 / 花月草紙 松平定信 / 滑稽雜記 曲亭馬琴
九 准后准三后考 白石 / 兎園小說 自六集至十集 屋代弘賢 / 浦浪錄 清水浜臣 / 清水浜臣 / 桂林漫錄 桂川甫周 / 中庸 伊藤東涯 / たはれ草 松平定信
十 梧窓漫筆 太田南畝 / 拾遺 尾張藩士 / 雜後百話 不著撰者 / 春波樓筆記 司馬江漢 / 輶軒小錄 伊藤東涯 / 閑雜記 成島司直 / 人名考 新井白石 / ゆの草紙 松平定信

○文學博士黑川眞頼校閲
○鈴木弘恭著

新撰 **日本文學史畧**

洋裝美本 定價四十錢 全一冊 郵稅八錢

本書は鈴木論の所々の學校にて講述せられしを集めて一卷とはなしたるなり神代より光格天皇までの文學を第一紀元前の文學第二紀元後の文學第三奈良朝前の文學第四奈良朝の文學第五平安朝の文學第六延喜天暦朝の文學第七寛和以後の文學第八鎌倉時代の文學第九足利時代の文學第十慶長後の文學てふ如く序を追ひ類を分ちていとつまびらかにせられたり斯の道に志ある者一度此書を開かは國文の變遷より家々の文派まで嘆々たることを得ん請ふ愛顧を賜へ

今泉定介先生 畠山健先生 校正

百家說林 前後集 全二帙

本書の特色(第一)格言と傳記と多きが故に修身科の參考書として最適當なること(第二)家屋構造の沿革及衣服器具等に關せる事は精密なる國史を博入したれば歴史科の參考書に缺くべからざる事(第三)普通國文の摸範となるべきものは大抵この書に網羅せり故に作文科の參考書に必用なる事……これ殊に世間の好評を博し發賣の數まことに數千部の多きに達せる所以ならん今や文部大臣は大に普通教育の國文を奬勵せざる而して其の經營ならざるを知り給はんことを……選擇の文は殆こゝに盡くせり乞ふ江湖の諸彦幸に一本を購ひて其の經營ならざるを知り給はんことを

前集目次

一 獨語 太春菅原道眞 / 雅のすさび 宰相中將 / 北邊隨筆 富士谷成章 / 御杖 奈留別志 賀茂眞淵
二 雨窓閑話 不著撰者 / 山鄙の手ぶり 石川雅望 / かたびさし 齋藤彦麿 / 北里十二時 石川雅望
三 玄同放言 上下集 曲亭馬琴 / 放言集 本居宣長 / 菅庵隨筆 朝倉孝景 / 奥のほそ道 芭蕉翁
四 尾花かゝみ 宣長門人 / 圓珠庵雜記 僧契沖 / 侶名世說 南太川眞淵 / 翻のあき風 賀茂眞淵 / 馬場浸錄 青山定雄 / 孫惠浸錄 松平定信 / 雜說 松平定信
五 鎖屑 谷川士清 / 蜘蛛の糸巻 岩瀬京山 / しりうこと 小説家主人 / 春波樓筆記 司馬江漢 / 雜後百話 不著撰者

後集目次

六 椿園雜書 三浦貞山 / 埴生雜考 安藤信正 / 家屋雜考 澤田名垂 / 朝寢漫筆 太田南畝
七 兎園小說 自一集至五集 山崎美成 / 自六集至十集 屋代弘賢 / 小かれ草 石川雅望 / 瞿麥 柳亭種彦 / 閑窓自語 大田南畝 / 韓昜 元木網 / 人名考 新井白石 / 大海のはし 宮崎成斐
八 鳥おどし 川崎孫三郎 / 兎園小說 自一集至五集 山崎美成 / 百鬼夜行 山東京傳 / 我宿草 太田道灌 / 花月草紙 松平定信 / 滑稽雜記 曲亭馬琴
九 准后准三后考 白石 / 兎園小說 自六集至十集 屋代弘賢 / 浦浪錄 清水浜臣 / 清水浜臣 / 桂林漫錄 桂川甫周 / 中庸 伊藤東涯 / たはれ草 松平定信
十 梧窓漫筆 太田南畝 / 拾遺 尾張藩士 / 雜後百話 不著撰者 / 春波樓筆記 司馬江漢 / 輶軒小錄 伊藤東涯 / 閑雜記 成島司直 / 人名考 新井白石 / ゆの草紙 松平定信

發行所 東京市小石川區傳通院前大門町一 青山堂書店 (電話千二百六番)

○新井白石著
○小中村清矩校閲
○鈴木弘恭 校正

校正 折たく柴の記

洋裝合本 定價四十錢 全一冊 郵稅八錢

此書は新井白石か我一代にありしとゝろ思ひ出つるまゝに書あらはされし者にて先生の國事に功績ありしあさの作れるへきたよりにも此上もなき貞書なれは此たび鈴木弘恭大人に請ひて字句を校正し假字の誤りを正し發行せり一讀すれば得る所少なからざべし

○新井白石著 ○内藤雅夫標注 訂正標注 **折たく柴の記**

本書は内藤雅夫大人にこひて當時の記錄に在れる參考となるへき物を大小さなく抄出して讀者の參考に備へ且記錄を校正して發行せり請ふ一讀を賜へ

拾冊 定價金四圓〇一冊に付金四十錢づゝ 全部御用の向は特別三割引にて販賣す市外郵稅各一冊に付金八錢づゝ

◎教科書 歴史

作者小傳

兼好は、姓を占部といふ、大織冠鎌足公、十九世の孫なり。世々山城の國、東山の吉田に住せしを以て、吉田兼好とはいふなり。後宇多院の北面の侍にて、左兵衛の佐なりしが、帝崩御の後、遁世して、兼好法師といひ、吉田双岡に住ず、天台の學に達し、ことに老莊の道を好めり。歌よむこと、文かく事はもつとも巧みにて、頓阿、淨辨、慶運、兼好とて、このごろの四天王とはいはれたり。人あるひは、高の師直の艶書をかけることなどあげて、かれこれあげつらふもあれど、ろは深き心ありてせし事にて、兼好の本意にあらざること、また中宮の小辨密通のことは、小辨が父成忠へ、兼好して度々内勅を傳へられし事實の、謬傳なるよしは、古人のあげつらひによりて、いと明らかなり。またあづまくだりは、資朝卿とはかりて、北

條家をうかゞはんとてなり、しかのみならず、南朝よりめさるれば、時をもうつさずはせのぼり、北朝よりすれば、またものをもうけざるなど、をゝしともをゝし。そのほか宇都宮公綱、藥師寺公義など歌の事たづねしに、始終こたへもせざりしなど、いと〳〵こゝちよし。まことに兼好は、南朝の忠臣、一世の大智識なり。後葬地を双岡に下し、櫻をうゑて、

ちぎりおく花とならひのをかのへに
あはれいくよのはるをすぐさん

との一首をのこして終りぬ年六十八。そのあらはす所のもの徒然草、及び歌集あり、共に大に世に行はる。

緒言

この徒然草は、兼好の隨筆なり。文のたくみなるは、さらにもいはず。兼好一己の發明にかゝる、哲理どもかきつらね、世にえきあることは、かゝるたぐひの書とも、世にいとおほかれど、この書にまさるは、よもあらじかし。そなり昔時においては、この書を日本の論語とて、もてはやし、大に世に行はれける。しかはあれども、もとより法師の手に、なりたるものなれば、僻論邪說もまた打まぢり、初學の人々まどひやすき、ふし〳〵なんあるを、おのれはやくより、とりのきたらましかは、國文まなぶ人々にも、身ををさむる道のたよりにも、とよのうよからまし、とは思へども、いまだいとまもなくて、えはたさゞりしが、この冬休みには、いかにもして、と思ひたちしまゝ、かねてのかはやと思ひしふし〴〵、こと〳〵にのさぐり、かつちうさくをもと思ひしが、こはすでに、古人のものせしもの數もしらず、いとおほくしあれば、また今更にすべきにもあらねば、たゞ讀者の便をはかり、少しく傍註を加へ、かつ語句の間に、畫を施してかねて語格の大概を示しぬ、もとより不學のものゝなせしわざなれば、まだしきところもありぬべし

凡例

一　もとより古人のものせしものを、かれこれ細工するは、本意にはあらざる事なれど教授上、止むを得ざるより、なしたる事なれば、文は秀逸ならざるも、教授上害なしと思ふは、なるべく存し、たとへ文は秀逸なりとも、初學の者をまどはす如き文は、ことゞく除く。

二　文章中、文字の傍に‖‖圖の如き、畫を施すは、係結を標するものなり。

三　文章中、文字の傍に——圖の如き畫を施すは、反語または省句を標したるものなり。たとへば、はや、かは、とぞ、こそ、などにて切れとゞまるは、反語または省句の文法なり。

四　文章中 ┃ 圖の如き、畫を施すは、段落を標するものなり。

五　御國言葉を解するに、漢字を以てするは、あるひは適切なるもあれど、多くは適切ならぬものなれば、傍註の漢字になづみて、國語の本意を失ふべからず。

六　題目は原本にはなきを今教授上の便益をはかりて段毎に付す

つれ〳〵草

栗田　寛校閲
長田致孝訂正

(一) 世人に對する願望の事

つれ〳〵なるまゝに、日くらしすゞりにむかひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなくかきつくれば、あやしうこそものくるほしけれ。

世に生れては、ねがはしかるべきことこそおほかめれ。

おのれ、かたちの御ぐしも、なりもかたちもあやしからぬ、ことなき一の人の御ありさまハさらなり。たゞ人も、おのれ、かたちの御ぐしも、なりもかたちもあやしからぬ、ことなき一の人の御ありさまハさらなり。たゞ人も、とりなす日枠はるきはゝゆゝしと見ゆ。其子、むまごまでハはふれにたるいへの、門さかりなるきはゝゆゝしと見ゆ。其子、むまごまでハはふれにたるいへの、門さかりなるかしそれより去もつかたは、ほどにつけつゝ時にあひ、

去たりかほなるも、みづからハいみじと思ふらめどいと口をし。法師は

かりうらやまし去からぬものハあらじ。人にハ木のはしのやうにおもはるゝよと。清少納言がかけるも、ゆにさる事ぞかし。勢まうにのゝしりた

るにつけて、いみじとはみえず。増賀ひじりのいひけんやうに、名聞くるしく、ほとけのみをしへに、たかふらんとぞおぼゆる。ひたふるの世すて人は、なかなかあらまほしきかたもありなん。人はかたちありさまのすぐれたらんこそあらまほしかるべけれ。もののうちいひたるきゝにくからず、愛敬ありて、ことばおほからぬこそ、あかずむかはまほしけれ。めでたしとみる人の、心おとりせらるゝ本性みえんこそ、くちをしかるべけれ。さなかたちこそ。うまれつきたらめ。心はなどかゝしこきより。かしこきにもうつさばうつらざらん。かたち心さまよき人も、ざえなくなりぬれば、さなくだり。かほにくさげなる人にも、たちまじりて、かけずけおさるゝこそ、ほいなきわざなれ。ありたきことは、まことしき文のみち、作文和歌、くわんげんのみち、またゆうそくにくじのかた、人のかゞみならん、こそ、いみしかるべけれ。手などつたなからずはしりかき、聲をかしくて拍子とり。いたましうするものから、げこならぬこそ。をの子はよけれ。

(二) 節險の事

いにしへのひじりの御代の、まつりことをもわすれ。民のうれへ、くにのそこなはるゝをもしらず。よろづにきよらをつくして、いみじとおもひ、所せきさましたる人こそ、うたておぼゆれ。所なくみゆれ。衣冠よりうまくるまにいたるまで、あるにしたがひてもちゐよ、美麗をもとむることとなかれとぞ。九條殿のゆるかいにも侍る。順徳院の禁中のことゞも、かゝせ玉へるにも、おほやけのたてまつりものは。おろそかなるをもつて、よしとすとこそ侍れ。

(三) 家居につきての心得

家ゐのつぎ〳〵しく、あらまほしきこそ、かりのやどりとはおもへど、興あるものなれ。よき人の、ゝどやかに住みなしたるところは、さし入たる月の色も。一きはしみ〴〵とみゆるぞかし。いまめかしくきらゝかならねど、こだちものふりて、わざとならぬにはの草も、こゝろあるさまにすのこすいがいのたよりをかしく、うちある調度もむかしおぼえて、やすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。おほくのたくみの。心をつくしてみが

きたて、からのやまとの、めづらしくえならぬ調度ども、ならべおき、前栽のくさ木まで、心のまゝならず、つくりなせるは、見るめもくるしく、いとわびし。さてもやは、ながらへすむべき。またときのまの、けふりともなりなんとぞ、うち見るよりおもはるゝ。大かたは、家居にこそ、ことさまはおしはからるれ。後徳大寺のおとゞ（大臣）の寢殿に、蒔ゐさせじとて、なはをはられたりけるを。西行がみて、とびのゐたらんは、なにかはくるしかるべき。此とのゝ御心、さはかりにこそとて、其後はまゐらざりける。ときゝはべるに、あやの小路、宮のおはします、小坂殿のむねに、いつぞやなはをひかれたりしかは、かのためしおもひ出られはべりしに、まことや鳥のむれゐて、池のかはづをとりけれは、御らんじかなしませたまひてなん、とこと人のかたりしこそ、さてはいみしくこそとおはえしか。徳大寺にも。いかなるゆゑか、はへりけん。

（四）同上

かんなづきのころ、くるす野といふ所を過て、ある山里ゝ、たづね入ると侍りしに。はるかなる苔のほそみちをふみわけて、心ほそく、すみなしたるいほあり。木のはにうづもるゝ、かけひのしづくならでは、露おとなふものなし。あかだなに、菊紅葉などをりちらしたる、さすがに、すむ人のあれはなるべし。かくてもあられけるよ、と哀にみるほどに、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきひしく、かこひたりしこそ、すこしことさめて、此木なからましかは、とおほえしか。

（五）おなし心ならん友はあらましき事。

おなじ心ならん人と、しめやかに物がたりして、をかしきことも世のはかなきことも、うらなくいひなくさまんこそ、うれしかるべきに、さる人あるまじけれは、つゆたがはさらんと、むかひゐたらんは、ひとりあるこころちやせん。たがひにいはんほどのことをは、けにときくかひあるものから、いさゝかたがふ所もあらん人こそ、われはさやは思ふなど、あらそひにくみ、さるからさぞとも、うちかたらはゝ、つれ〴〵なぐさまめとおもへど、げにはすこしかこつかたも、我とひとしからざん人は、大かたのよ

しなしごと、いはんほどこそあらめ、まめやかの心のともには、よるかにへだゝる所の、ありぬへきぞ。わひしきや。

（六）樂は書を讀むにしかざる事

ひとりともしびのもとに、文をひろげて、見ぬよのひとを友とするこそ、こよなうなぐさむわざなれ。文は文選のあはれなるまき〳〵、白氏ふんしふ、老子のことは、南華の篇、此くにのはかせどもの、かけるものも。いにしへのは。あはれなることおほかり。

（七）和歌のおもしろき事

和歌こそをかしき物なれ。あやしのしづ山がつのしわさも、いひいづればおもしろく、おそろしきゐのたゝ〳〵も、ふするのととといへば、やさしくなりぬ。此ころの歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと、みゆるはあれど、ふるき歌どものやうに、いかにぞや。ことばのほかにあはれにけしきおぼゆるはなし。つらゆきが、いとによる物ならなくにといへるは、古今集の中の、うたくづとかやいひつたへたれど、今の世の人の、よみぬべきことがらとは見えず。其世のうたには、すがたことは、此たぐひのみおほし。此うたにかぎりて、かくいひたてられたるもしりがたし。げんじ物語には、物とはなしにとぞかける。新古今には、殘る松さへみねにさびしき、といへる歌をぞいふなる。まことにすこしくだけたるすがたにもやみゆらん。されど此うたも、衆議判のとき、よろしきよしさたありて、後にも、ことさらに感じ仰せくだされけるよし、家長が日記にはかけり。歌のみちのみ、いにしへにかはらぬなどいふこともあれど、いざや、今もよみあへる。おなじことはうたまくらも、むかしの人のよめるは、さらにおなじ物にあらず。やすくすなほにして、すかたもきよげに、あはれもふかくみゆ。梁塵秘抄の郢曲のことはこそ、またあはれなることはおほかめれ。昔のひとは、いかにいひすてたることぐさも、皆いみしくきこゆるにや。

（八）音樂のおもしろき事

かぐらこそ、なまめかしくおもしろけれ。おほかたものゝねには、ふえ、ひちりき、つねにきゝたきは、びは、わごん。

(九) 花麗をいましむる事

人はおのれをつゝまやかにして、おごりをしりぞけて、たからをもたず、世をむさぼらざらんぞいみじかるべき。昔より、かしこき人のとめるはまれなり。もろこしに許由といひつる人は、さらに身にしたがへるたくはへもなくて、水をも、手してさゝげてのみけるをみて、なりひさごといふものを、人のえさせたりければ、ある時木のえだにかけたりければ、風にふかれてなりけるを、かしがましとてすてつ。又手にむすびてぞ水ものみける。いかばかり心のうちすゞしかりけん。孫晨は、冬月にふすまなくて、わらひとつかねありけるを、夕にはこれにふし、あしたにはをさめけり。もろこしの人は、これをいみしとおもへばこそ、しるしとゞめて、世にもつたへけめ。これらの人は、かたりもつたふべからず。

(十) 四時のついておもしろき事

をりふしのうつりかはるこそ、物ことにあはれなれ。ものゝあはれはあきこそまされ、と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥のこゑなども、ことのほかにはるめきて、のどやかなる日かげに、かきねのくさ、もえ出るころより、やゝ春ふかくかすみわたりて、花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ。をりしも雨風うちつゞきて、心あはたゞしくちりすぎぬ。青はになり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞなやます。花たちはなは、名にこそおへれ。猶梅のにほひにぞ、いにしへのことともたちかへり、こひしう思ひいでらるゝ。山吹のきよけに、ふぢのおぼつかなきさましたる、すべておもひすてがたきことおほし。灌佛のころ、まつりのころ。わかはのこすゑすゞしげに、しげりゆくほどこそ、世のあはれも、人のこひしさもまされ、と人の仰られしこそ、ゆにさるものなれ。五月あやめふくころ、さなへとるころ、くひなのたゝくなど、心ほそからぬかは。六月のころ、あやしき家に、ゆふがほのしろく見えて、かやり火ふすぶるもあはれなり。みなつきはらへ又をかし。たなばたまつりこそ、なまめかしけれ。やう〳〵夜さむになるほど、かりなきてくるころ、萩のしたはいろづくほど、わさ田かりほ

すなど、とりあつめたることは、秋のみぞおほかる。又の野わきのあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、みなゆんじ物語、まくらの草子などに、ことふりにたれど、おなじこと、又いまさらにいはじとにもあらず。おぼしきことといはぬは、はらふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あじきなきすさびにて、かいやりすつべき物なれば、人のみるべきにもあらず。さて冬かれのけしきこそ、秋にはをさ〳〵おとるまじけれ。みぎはの草に、もみぢのちりとどまりて、霜いとしろうおけるあした、やり水よりけぶりのたつこそをかしけれ。年のくれはてゝ、人ごとにいそきあへるころぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、みる人もなき月の、さむけくすめる廿日あまりの空こそ、心ほそき物なれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやんことなき。公事くじともよほしおこなはるゝ、さまぞいみしきや。追儺より四方拝につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜、いたうくらきに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たゝきはしりありきて、何ことにかあらん、ことゝしくのゝしりて、足を空にまどふが、暁かたより、さすがにおとなくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。なき人のくる夜とて、魂まつるわざは、此ころ都にはなきを、あづまのかたには、猶することにてありしこそ、あはれなりしか。かくてあけゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、引かへめづらしき心ちぞする。大路のさま、松たてわたして、花やかにうれしげなるこそ、又あはれなれ。

（十一）花鳥風月のおもしろき事

よろづのことは、月みるにこそなぐさむものなれ。ある人の、月はかりおもしろき物はあらじといひしに、又ひとり、露こそあはれなれ、とあらそひしこそをかしけれ。をりにふれは、何かはあはれならざらん。月花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくたけて、きよくながるゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。沅湘日夜東流去、愁人のために、とゞまることしはらくもせず、といへる詩を、見はべりしこそあはれなりしか。嵇康も山澤にあそびて、魚鳥をみれは、心たのしむといへり。人と

ほく水草きよき所に、さまよひありきたるはかり、心なぐさむことはあらじ。

（十二）古風のしたはしき事

何事もふるき世のみぞしたはしき。今やうは、無下にいやしくこそなり行めれ。かの木のたくみのつくれる、うつくしきうつはものも、古代のすがたこそ、をかしとみゆれ。文のことばなどぞ、昔のほうこ（反古）どもはいみしき。たゞいふことばも、くちをしうこそなりもてゆくなれ。いにしへは車もたけよ、火かゝけよ、とこそいひしを、今やうの人は、もてあけよ、かきあけよといふ。とのも寮人（松明）数たてといふべきを、たちあかし（大明）ししろくせよといひ、最勝講の、御ちやうもん所なるをは、御こうのろとこそいふを、こうろといふ。口をしとぞ、ふるき人は仰せられし。

（十三）神道のたふとき事

齋宮の野宮（ノミヤ）におはしますありさまこそ、やさしくおもしろきことのかぎりとはおほえしか。經佛などいみて、なかこ（佛經）、そめ紙などいふなるものを

かし。すべて神の社こそ、すてがたくなまめかしきものなれ。物ふりたる杜のけしきも、たゝならぬに、玉かきしわたして、さかきにゆふ（榊結）かけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢、かも、かすが、ひら野、住吉、みわ、きふね、吉田、大はらの、まつのを、梅の宮。

（十四）世の變易無常なる事

あすか川のふち瀬、つねならぬ世にしあれは、時うつりこと（事）さり、たのしびかなしびゆき（行遁）かひて、花やなりしあたりも、人すまぬの（野）となり、かはらぬすみかは人あらたまりぬ。桃李ものいはねは、たれとともにか昔をかたらん。ましてみぬいにしへの、やんご（貴）となかりけんあとのみぞいとはかなき。京極殿、法成寺など見るこそ、心さしとゞまり、こと變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿のつくりみがゝせ玉ひて、庄園おほく（寄附）よせられ。我御ぞう（像）のみ、ゝかどの御うしろみ、世のかため（往石）にて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かはかりあせ（荒）はてんとはおぼしてんや。大門金堂など、ちかく（近頃）までありしかど、正和のころ、南門はやけぬ。金堂

は、其後たふれふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし。無量壽院は、りぞ、其かた（形）とてのこりたる。丈六の佛九躰、いとたふとくてならびおはします。行成大納言の額、かねゆきがゝける扉、あざやか（鮮明）にみゆるぞ、あはれなる。法花堂なども、いまだはべるめり。これも又いつまでかあらん。かはかりのなごりだになき所々は、おのづから、石すゑはかりのとるもあれど、さだかにしれる人もなし。されは、よろづにみさらん世までを、思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。

（十五）同上

御國ゆづりの節會おこなはれて、劍璽、内侍所、わたしたてまつらるゝほどこそ、かきりなう心ぼそけれ。新院のおりゐ（位）させたまひての春、よませたまひけるとかや。

とのもりのどものみやつことよそにして
はらはぬにはにはに花ぞちりしく

今の世のことしゆきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞ、さびしけなる。かゝるをりにぞ、人のこゝろもあらはれぬべき。

（十六）すぎにし方のこひしきの事

志づかに思へは、よろづにすぎにしかたの、こひしさのみぞせんかたなき。人志ずまりてのち、ながき夜のすさびに、何となきぐそく（具足）とりしたゝめ、のこしおかじと思ふほうごなど、やり（破）すつる中に、なき人の手ならひ、ゑかきすさびたる、見出たるこそ、たゞそのをりの心ちすれ。此ごろある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつのとしなりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれしぐそくなども、心もなくてかはらず久しきいとかなし。

（十七）あとなき世のかなしき事

人のなきあと（死後）はかり、かなしきはなし。中陰の程、山里などにうつろひて（移）、便あしくせはき所に、あまたあひゐて、後のわざ（法事）どもいとなみあへる、心あわたゞし。日數のはやくすぐる程ぞ、物にもにぬ。ぱての日はいとなさけなう、たがひにいふともなく、我かしこけに、物ひきしたゝめ、ちり〳〵

に行あがれぬ。もとのすみかにかへりてぞ、さらにかなしき事はおほかるべき。しか〳〵の事は、あなかしこ、跡のためいむなることぞなどいへるとそ、かばかりの中に、何かはと、人の心は猶うたておぼゆれ。とし月へても、つゆわすれぬにはあらねど、さる者は、日々にうとしといへることなれば、さはいへど、そのきはかりは覺えぬにや、よしなしといひて、うちもわらひぬ。かからは、けうとき山の中にをさめて、さるべき日はかり、まうでつゝ見れば、ほどなくそとはもこけむし、この葉ふりうづみて、夕のあらし、夜の月のみぞ、ととふよすがなりける。思ひいでゝ、しのぶ人あらんほどとそあらめ。そも又ほどなくうせて、聞つたふるはかりのすゑゝゝは、あはれとやは思ふ。さるは、あとふわざもたえぬれは、いづれの人と名をだにしらず。年々のはるの草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はてはあらしにむせびし松も、千とせをまたで、たきゞにくだかれ、ふるきつかは、すかれて田となりぬ。そのかたはなくなりぬるぞかなしき。

（十八）言語はやさしくあらまほしき事

雪のおもしろうふりたりしあした、人のがりいふべき事有りて、文をやるとて、雪のと何ともいはざりし返事に、此雪いかゞ見ると、一筆の給はせぬほどのひが〳〵しからん人の仰らるゝとき、いとをかしすゝ〳〵口をしき御心なり、といひたりしとそ。かしかりしが。今はなき人なれば、かばかりの事もわすれがたし。

（十九）行は常に心すへき事

九月廿日の比、ある人にさそはれ奉りて、あくるまで月見ありく事侍しに、をぼし出る所有りて、案内せさせて入り給ひぬ。荒たる庭の露しけきに、わざとならぬにほひ、しめやかに打かをりて、忍びたるけはひ、いと物哀なり。よきほどにて出で玉ひぬれど、猶とゞまのいうに覺えて、物のかくれより、しばし見るたるに、つまどを今すこし押しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらまし、口をしからまし、跡までみる人有とはいかでかしらん。かやうの事は、たゝ朝夕の心づかひによるべし。其人

ほどなくうせにけりとき〻侍りし。

（廿）名聞利欲にまよふは愚なる事

名利につかわれて、しづかなるいとまなく、一生をくるしむるこそをろかなれ。たからおほければ身をまもるにまどし。害をかひ、わづらはるをまねくなかだちなり。身の後には、金をして北斗をさゝふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚なる人の目をよろこばしむる樂しみ、又あじきなし。大なる車、こえたる馬、金玉のかざりも、心あらん人は、うたておろかなりとぞみるべき。金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまどふは、すぐれて愚なる人なり。うづもれぬ名を、ながき世に殘さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚につたなき人も、家に生れ時にあへばたかき位にのぼり、をごりをきはむるも有り。いみじかりし賢人聖人、みづからいやしき位にをり、時にあはずしてやみぬる又多し。ひとへにたかきつかさ位をのぞむも次に愚なり。ちえと心とこそ、世にすぐれたるほまれものこさまほしきを、つら〻、思へば、ほまれを愛するは、人のきゝをよろこぶなり。ほむる人、そしる人、共に世に止らず。つたへきかん人、また〻すみやかにさるべし。誰をかはぢ、誰にかしられんとをねがはん。ほまれは又そしりのもとなり。身の後の名のこりて、さらにえきなし。是をねがふも次に愚なり。たゞしひて智をもとめ、賢をねがふ人のためにいはゞ、ちゑ出てはいつはり有り。才能はぼんなうの增長せるなり。うたへてきゝ、まなびてしるは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく德もなく、功もなく名もなし。誰かしり誰かつたへん。これ德をかくし、愚をまもるにはあらず。もとより賢愚得失のさかひにをらざれはなり。まよひのこゝろをもちて、名利の要を求むるにかくのごとし。はんじはみな非なり。いふにたらず。たらず。

（二十一）栗食ひ娘の事

いなはの國に、何の入道とかやいふものゝむすめ、かたちよしとき〻て、

人あまたいひわたりけれども、此むすめたゞくりをのみくひて、さらによ(夜)ねのたぐひをくはざりければ、かゝるとやうのもの、人にみゆべきにあらずとて、おやゆるさゞりけり。

（二十二）死期の到來忘るべからざる事

五月五日、かものくら(競)べ馬を見侍りしに、車の前に、雜人立へだてゝ見えざりしかば、おの〳〵おりて、らちのきはによりたれど、とに人おほく立とみて、わけ入ぬべきやうもなし。かゝるおりに、むかひなるあふ(樺)ちの木に、法師ののぼりて、木のまたについ(居)ゐて、物みるあり。取りつきながら、いたうねぶりておちぬべき時に、目をさますと度々なり。是をみる人、あざけりあざみて、世のしれ(痴)もの(者)のかな。かくあやふき枝のうへにて、やすき心有りてねふらんよといふに、我心にふと思ひしまゝに、あ(吾)れらが生死のたうらい、たゞ今にもやあらん。それをわすれて、物みて日をくらす、おろかなる事は、猶まさりたるものをといひたれば、まへなる人ども、まことにさにとそ候ひけれ。もつともおろかに候といひて、みなうしろを見かへりて、爰へいらせ給へとて、所をさりてよび入れ侍りにき。かほどのとわり、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの思ひかけぬ心ちして、むねにあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりてものにかんずる事なきにあらず。

（二十三）行雅僧都奇病の事

からはし中將といふ人の子に行雅僧都とて、教相の人の師する僧有けり。氣のあがるやまい有りて、としのやう〳〵たけ(長)くるほどに、はなの中ふたがりて、いきもいでがたければ、さま〴〵につくろ(治療)ひけれど、わづらはしくなりて、目、まゆ、ひたいなどもはれまどひて、うちおほひければ、物も見えず。二の舞のおもてのやうに見えけるが、たゞおそろしく鬼のかほになりて、目はいたゞきのかたにつき、ひたいのほど、はなになりなどして、後は坊のうちの人にも見えずこもりゐて、年久しく有りて、猶わづらはしくなりて死にけり。かゝる病もある事にとそ有りけれ。

（二十四）人は平生を謹むへき事

春のくれつかた、のどやかにえんなる空に、いやしからぬ家のおくふかく、木だち物ふりて、庭にちりしほれたる花、見すぐしがたきを、さしいりて見れば、南面のかうし、みなおろしてさびしげ成るに、ひがしにむきてつまどのよきほどにあきたる、みすのやぶれより見れば、かたちきよけなる男の、としはたちはかりにて、うちとけたれど、心にくゝのどやかなるさまして、机のうへに文をくりひろけて見ゐたり。いかなる人なりけん。たづねきかまほし。

（二十五）女房の心つかひめてたき事

あやしの竹のあみ戸の内より、いとわかき男の、月かげにいろあひさだかならねど、つやゝかなるかり衣に、こきさしぬき、いとゆゑづきたるさまにて、ささやかなるわらはひとりをぐして、はるかなる田の中のほそ道を、いなはの露にそぼちつゝ分行ほど、笛をえならずふきすさびたる。あはれとききしるべき人もあらじと思ふに、ゆかんかたしらまほしくて、見おくりつゝ行けば、笛をふきやみて、山のきはに、惣門のあるうちに入ぬ。榻にたてたる車のみゆるも、つねよりは目とまる心ちして、下人にとへば、しか〳〵の宮の、おはしますよしにて、御佛事などさふらふにやといふ。御堂のかたに、法師ども参りたり。夜さむの風にさそはれくる、空たき物の勾ひも、身にしむ心ちす。寢殿より御堂の廊にかよふ女はうの、おひ風よういなど、人めなき山里とゐはず。心づかひしたり。心のまゝにしげれる秋の野らは、おきあまる露にうづもれて、むしのねかごとがましく、やり水のおとのどやかなり。都の空よりは、雲のゆきゝもはやき心ちして、月のはれくもる事さだめがたし。

（二十六）良覺僧正榎をきりし話

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、きはめてはらあしき人なりけり。坊のかたはらに、大きなるえの木のありければ、人えのきの僧正とぞいひける。此名去かるべからずとて、かの木をきられにけり。其根のありければ、きりくゐの僧正といひけり。いよ〳〵はらたちて切くゐをほりすてたりければ、其あとおほきなるほりにてありければ、堀池の僧

正とそいひける」

（二十七）世人の口さかなき事

柳原の邊に强盜法印と號する僧有りけり。度々がうたうにあひたるゆゑに、此名をつけにけるとぞ。

（二十八）くさめ〳〵といひし尼の話

ある人清水へ參りけるに、老たるあまの行つれたりけるが、みちすがらくさめ〳〵といひもて行きければ、あま御前、何事をかくはの給ふぞ、とひけれども、いらへ（返答）もせず。猶いひやまざりけるを、たび〳〵とはれて、うちはらだちて、やゝはなひたる時、かくまじない（禁厭）ねは死ぬるなりと申せば、やしなひ君のひえの山に、兒（ちご）にておはしますが、たゞ今もやはなびせはんと思へば、かく申ぞかしといひけり。有がりき心さしなりけんかし。」

（二十九）人は無常なることを忘るべからざる事

老きたりて、はじめて道を行ぜんとまつ事なかれ。ふるき塚、おほくは是少年の人なり。はからざるに病をうけて、たちまちに此世をさらんとする時にこそ、はじめて過ぬるかたの、あやまれるとはしらるなれ。あやまりといふは、他の事に、あらず。すみやかにすべき事をゆるくし、ゆるくすべき事をいそぎて、過にしとのくやしきなり。其時くゆるともかひあらんや。人はたゞ、無常の身にせまりぬる事を、心にひしとかけて、つがの（嗣）まもわするゝまじきなり。

（三十）人を用ゆるには任にたゝふべき人を撰ぶべき事

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰て、水車を作らせられけり。多くのあしを給て、數日にいとなみ出してかけたりけるに、大かためぐらさりければ、とかくなほしけれども、つゐにまはらでいたづらにたてりけり。さて、うぢ（宇治）の里人をめして、こしらへさせられければ、やすらかにゆひて（結）參らせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水をくみいるることめでたかりけり。よろづにその道をたれるものは、やんごとなきものなり。

（三十一）何事も先達はあらまほしき事

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を、をがまざりければ、心うくおぼえて、ある時思ひたちて、たゞひとり かち歩より まゐでけり。ごくらくじ高良などをがみて、かはかりと心得てかへりにけり。さてかたへの人にあひて、とし比思ひつる事はたし侍りぬ。さゝしにもすぎてたふとくこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに、山へのぼりしは、何事か有けん。ゆかしかりしがど、神へ参るこそほいなれと思ひて、山まではみずとぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきとなり。

（三十二）興すぐれは必ず失ある事

是も仁和寺の法師、わらはの法師にならんとするなごりとて、各あそぶ事有りけるに、おひて興に入るあまり、かたはらなるあしかなへを取りて、頭にかづきたれは、つまるやうにするを、はなをおしひらめて、かほをさし入れて舞出たるに、滿座興に入る事かぎりなし。しばしかなでて後、ぬかんとするに、大かたぬかれず。しゆえんことさめて、いかゝはせんとまどひけり。どかくすれは、くびのまはりかけて、血たり、たゞはれにはれみちて、いきもつまりけれは、打わらんとすれどたやすくわれず。ひゞきてたへがたかりけれは、かなはですべきやうなくて、三足なるつのゝうへに、かたびらを打かけて、手を引きつゝをつかせて、京なるくすしのがりゐて行ける。道すがら人のあやしみ見ることかぎりなし。くすしのもとにさしいりて、むかひゐたりけん有さま、さこそとやうなりけめ。物をいふもくゞもりごゑにひゞきて聞えず。かゝる事は文にも見えず。つたへたるをしへもなしといへは、又仁和寺へ歸りて、したしきものゝおいたる母など、まくらがみによりゐて、なきかなしめども、きくらんとも覺えず。かゝるほどにあるものゝいふやう、たとひ耳はなこそきれうすとも、命はかりはなどかいきざらん。たゞちからをたてゝひき給へとて、わらのしべをまはりにさし入れて、かねをへたてゝ、くびもちぎるゝはかりひきたるに、みゝはなかけうげながらぬけにけり。からき命まうけて、ひさしくやみゐたりけり。」

（三十三）　同上

御室にいみじき兒の有けるを、いかでさそひ出してあそばん、とたくむ法師ども有りて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流のわり（辨當）とやうの物、ねんごろにいとなみ出て、箱風情の物にしたゝめ入れて、ならびの岡の便よき所にうづみ（埋）おきて、もみぢちらしかけなど、おもひよらぬさまにして、御所へ參りて、兒をそそのかし（勸誘）出にけり。うれしく思ひて、こゝかしこあそびめぐりて、有つる苔の莚になみゐて、いたうこそこうじにたれ（困）。あはれもみぢをたかん人もがな。しるしあらん僧たち、いのりこゝろみられよなどいひしろひ（合）て、うづみつる木のもとに、むきてず（數珠）おしすり、印ことゝ（一向）しくむすび出などして、いらなくふるまいて、木のはをかきのけたれど、つや〳〵物も見えず。所のたがひたるにやとて、ほらぬ所もなく、山をあさ（探）れどもなかりけり。「うづみけるを人の見おきて、御所へ參りたるまに、ぬすめるなりけり。法師どもとのはなくて、きゝにくゝ、いさかひはらだちてかへりにけり。」あまりに興あらんとする事は、

かならずあへなき（興醒）ものなり。

（三十四）　家の造りやうに付きての心得

家のつくりやうは、夏をむね（旨）とすべし。冬はいかなる所にもすまる。あつき比わろきすまゐは、たえがたきとなり。「ふかき水はすゞしげなし。あさくて流れたるはるかにすゞし。」とまかなる物を見るに、やり戸は蔀の間よりもあかし（明）。天じやうのたかきは、冬さむく灯くらし。造作は用なき所をつくりたる、見るもおもしろく、萬の用にもたちてよしとぞ、人のさだめあひ侍りし。

（三十五）　人に逢ひて物がたりなどする心得

久しくへだゝりてあひたる人の、我かたに有つる事、且々に殘りなく、かたりつゞくるとそあへなけれ。へだてなくなれぬる人も、程へて見るはばづかしからぬかは。「つぎざま（下拵）の人は、あからさま（明白）に立出てゝも、興有りつる事とて、いきもつぎあへずかたり興ずるぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、ひとりにむきていふを、おのづから人もきくにこそ

あれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出て、見る事のやうにかたりなせば、みな同じくわらひのゝしる、いとらうがはし（騒亂）をかしき事をいひても、いたくけうぜぬと、興なきことをいひても、よくわらふにぞ、品のほどばかられぬべき（思料）。人のみざまのよしあし、ざえ（才）ある人は、そのことなどさだめあへるに、おのが身にひきかけて、いひ出たるいとわびし、

（三十六）知らざることは語るべからざる事

人のかたりいでたる歌物語の、うたのわろきこそほいなけれ。すこし其道しらん人は、いみじと思ひてはかたらじ。すべていともしらぬ道のものがたりしたる、かたはらいたくきゝにくし。

（三十七）御産の時こしきおとす事

御産の時こしき（甑）おとす事は、さだまれる事にはあらず。御胞衣とゞこほる時のまじなひなり。どことほらせ玉ばねはこの事なし。下さまよりことおこりて、させる本説なし。大原のさとのこしきをめすなり。ふるき寶藏の繪に、いやしき人の子うみたる所に、こしきおとしたるをかきたり。

延政門院、いとき（幼稚）なくおはしましける時、院へ參る人に、御ことづてとて申させ玉ひける御歌

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじ
ゆがみもじとぞ君は覺ゆる

とひしく思ひ參らせ玉ふとなり。

（三十八）書寫の上人旅の假屋に宿りし時の話

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根清淨にかなへる人なりけり。旅のかりやに立いられけるに、豆のからをたきて、豆をにける音の、つゞ〳〵となるをきゝ玉ひければ、うとからぬおのれらしも、うらめしく我をはにて、からきめを見する物かなといひけり。たかるる豆がらのはら〳〵となる音は、わが心よりするとかは。やかるゝはいかはかりたえがけたれども、力なき事なり。かくなうらみ玉ひそとぞ聞えける。

（三十九）菊亭の大臣牧馬を彈し給ひし話

元應の清暑堂の御遊に、玄上はうせにし比、菊亭のおとゞ牧馬を彈じ玉

ひけるに、座について、先柱をさぐられたりければ、ひとつおちにけり。御ふところにそくい飯を、もち玉ひたるにてつけられにければ、神供の参るほどによくひてことゆ支なかりけり。いかなる意趣か有けん。物見ける衣被女房きぬかづきのよりてはなちて、もとのやうにおきたりけるとぞ。

（四十）名をきくよりやがて其人はおしはからるゝ事

名をきくよりやがておもかげは、おしはからるゝ心ちするを、見る時は又かねて思ひつるまゝの、かほしたる人こそなけれ。昔物語をきゝても、このごろの人の家のそこ程ほどにてぞ有けんとおぼえ、人も今見る人の中に思ひよそ擬へらるゝは、たれもかくおぼゆるにや。又いかなる折ぞたゞ今人のいふ事も目に見ゆるものも、わが心のうちもかゝるとの、いつぞや有しかとおぼえて、いつとは思ひいでねども、まさしく有し心ちのするは、われはかりかく思ふにや。

○（四十一）見くるしき物

いやしげなる者ゐたるあたりに、調度のおほき、硯に筆のおほき、持佛堂に佛のおほき、前栽に石草木の多き、人にあひて詞の多き、願文に作善おほく書のせたる。多くて見ぐるしからぬは、文車の文、塵塚のちり。

（四十二）世に語り傳ふること多くはそらごとなる事

世にかたりつたふると、誠はあいなきにや、多くはみなそらごとなり。あるにも過て、人は物をいひなすに、まして年月すぎ、さかひもへだゝりぬれは、いひたきまゝにかたりなして、筆にもかきとゞめぬれは、やがてさだまりぬ。道々の物の上手の、いみじき事など、かたくな頑なゝる人の、其道しらぬは、そゝろに神のごとくにいへども、道しれる人はさらに信もおこさず。音に聞と見る時とは、何事もかはるものなり。かつあらはるゝもかへりみず、口にまかせていひちらすは、やがてうきたる事と聞ゆ。又我もまとしからずは思ひながら、人のいひしまゝに、はなのほどおごめき動て、いふは其人のそらごとにはあらず。げにく〳〵しく所々うちおぼめき惑、よくしらぬよしして、さりながらつまゝ端〳〵あはせて、かたるそらごとはおそろしき事なり。わがためめん面ぼく目あるやうに、いはれぬるそらごとは、

人いたくあらがはず。皆人の興ずるそらごとは、ひとりさもなかりし物をと、いはんも詮なくて、きゝゐたるほどに、證人にさへなされて、いとゞさだまりぬべし。とにもかくにも空ごとおほき世なり。たゞつねにあるめづらしからぬ事のまゝに、心得たらんよろづたがふべからず。下ざまの人の物がたりは、耳おどろく事のみ有り。よき人はあやしき事をかたらず、かくはいへど佛神の奇特、權者の傳記さのみ信ぜざるべきにもあらず。是は世俗のそらごとを、ねんごろに信じたるもをこがましく、よもあらじなどいふもせんなければ、大かたはまとしくあひしらひて、ひとへに信ぜず、又うたがひあざけるべからず。

（四十三）新奇なることはこのむまじき事

今やうの事どもの、めづらしきをいひひろめもてなすこそ、又うけられね。世にとふりたるまで、しらぬ人は心にくし。今更の人などのあるとき、こゝもとにいひつけたると種、物の名など心得たるどち、かたはしいひかはし、目見あはせわらひなどして、心しらぬ人に、心えず思はする事、よなれずよからぬ人の、かならずある事なり。

（四十四）何事にもさしいづまじき事

何事も入たゝぬさましたるぞよき。よき人はしりたる事とて、さのみしりがほにやはいふ。かたるなかよりさし出たる人こそ、萬の道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されは世にはづかしきかたもあれど、みづからもいみじと思へるけしきかたくななり。よくわきまへたる道には、必くちおもく、とはぬかぎりはいはぬこそいみじけれ。

（四十五）已が業を忘るまじき事

人ごとに我身にうとき事をのみぞこのめる。法師は兵の道をたて、あだすは弓ひくすべしらず、佛法しりたるきそくし、連歌し管絃をたしなみあへり。されどおろかなる已れが道より、なほ人に思ひあなづられぬべし。法師のみにもあらず、上達部殿上人かみざまでおしなべて、武をこのむ人多かり。百たび戰て、百たびかつとも、いまだ武勇の名を定めがたし。其ゆゑは運に乘じてあだをくだく時、勇者にあらずといふ人なし。兵

つき矢ぎはまりてつひに敵にくたらず、死をやすくして、後はじめて名をあらはすべき道なり。いけらんほどは武にほこるべからず。

（四十六）もてる調度にて其人のはからるゝ事

屏風障子などの繪も、文字もかたくなゝる筆樣してかきたるが、見にくきよりも宿のあるじの、つたなくおぼゆるなり。大かたもてる調度にても、心おとりせらるゝとは有りぬべし。さのみよき物をもつべしとにもあらず、そんぜざらんためとて、品なく見にくきさまにしなし。めづらしからんとて用なきとどもしそへ。わづらはしくこのみなせるをいふなり。ふるめかしきやうにて、いたくとゝ〳〵しからず、ついえもなくて物がらのよきがよきなり。

（四十七）亢龍の悔の事

竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがり玉はんに、なにのとどこほりかおはせん、なれどもめづらしけなし。一上にてやみなんとて、しゆつけし玉ひにけり。洞院左大臣殿、此事を感心し玉ひて、相國ののぞみおはせざりけり。亢龍の悔有りとかやいふと待るなり。月滿てはかけ、物盛にしてはおとろふ。よろづのとさきのつまりたるはやがれにちかきみちなり。

（四十八）賢愚の評

人の心すなほならねば、いつはりなきにしもあらず。されどおのづから正直の人などかなからん、おのれすなほならねど、人の賢をみてうらやむは、よのつねなり。いたりて愚なる人は、たまゝ賢なる人をみてこれをにくむ。おほきなる利をえんがために、すこしきの利をうけず、いつはりかざりて名をたてんとすとぞしる。おのれが心にたがへるによりて、此あさけりをなすにてしりぬ。此人は下愚の性うつるべからず、いつはりて小利をも辭すべからず。かりにも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて、大路をはしらば則狂人なり。惡人のまねとて、人をところさは惡人なり。顔をまなぶは顔のたぐひ。舜を學ぶは舜の徒なり。僞ても賢をまなはん賢といふべし。

（四十九）下部に酒のますまじき事

下部に酒のますする事は、心すべきとなり。宇治にすみけるをのこ、京に具覺房とて、なまめきたる遁世の僧を、こじう(小男)となりければ、つねに申むつびけり。ある時むかへに馬をつかはしたりければ、ばるかなるほど(時程)なり、口つき(馬子)のをのこに、まづ一度せさせよとて、酒をいだしたれば、さしうけ〳〵よゝとのみぬ。たちうちはきて、かひ〳〵しけなれば、たのもしく覺えて、召ぐして行ほどに、木幡のほ(道)とりにて、奈良法師の兵士あまたぐしてあひたるに、此男立むかひて、日暮にたる山中にあやしきぞ、とまり候へといひて、太刀を引ぬきければ、人もみな太刀ぬき、矢はげなどしけるを、具覺房手をすりて、うつし(現)心なく、酔たるものに候、まげてゆるし給はらんといひければ、おの〳〵あざけりて過ぬ。此男具覺房にあひて、御坊は口をしき事し給つる物かな、おのれゐたる事侍らず、高名仕らんとするを、ぬける太刀むなしくなし玉ひつる事と、いかりてひた切にきりおとしつ。さて山だち(賊)ありとの〳〵しりければ、里人おとり(脅)て出あへは、われこそ山だち(賊)よといひて、ばしりかゝりつゝきりまはりけるを、あまたして手(頭)おほせうちふせてしばりけり。馬は血つきて、宇治大路の家にはしり入たり。あさましくて、をのこどもあまたはしらかしたれば、ぐぶくはうは、くちなしはらにようひふ(呻吟伏)したるを、もとめ出てかき(舁)もてきつ。からき命いきたれど、こし切そんぜられて、かたわになりにけり。

(五十) 猫またの話

奥山に猫またといふ物有て、人を食ふなる、と人のいひけるに、山ならねども、これ(此)らにも猫のへあがりて、ねこまたになりて、人取る事はあ(有)なる物を、といふもの有けるを、なに阿彌陀佛とかや、れん(連)がしける法師の、行願寺の邊に有けるがきゝて、ひとりありかん身は、心すべきとにこそと思ひける。比しもある所にて、夜ふくるまで連歌(歌)して、たゞひとりかへりけるに、小河のはたにて、おとにきゝしねこまた、あやまたず、あしもとへふとよりきて、やがてかきつくまゝに、くびのほどをくはんとす。肝心もうせて、ふせがんとするに、力もなく足もたゝず。小川へころび入りて、たすけよやねこまたよや〳〵とさけべば、家々より松どもともして、ばし

りよりてみれは、此わたり(渡)に見しれる僧なり。こはいかにとて、河の中よりいだきおこしたれは、連歌のか(賭)けものとりて、扇小箱など、ふところに持たりけるも水にいりぬ。希有にしてたすかりたるさまにて、はふ〳〵家に入にけり。」かひける犬のくらけれど、主をしりて飛びつきたりけるとぞ。

（五十一）　吉凶は人によりて日によらざる事

赤舌日といふ事、陰陽道にはさた(沙汰)なき事なり。昔の人是をいまず。この比何ものゝ云ひ出ていみはじめけるにか。此日ある事、末とほらずといひて、その日いひたりし事、したりし事、かなはず。得たりし物はうしなひつ。企てたりしとならずといふおろかなり。吉日をえらびてなしたるわざの、末とほらぬをかぞへて見んも又ひとしかるべき。「其ゆゑは、無常變易のさかひ、有りとみるものも存せず始ある事も終なし。心さしはとゞけず、望はたえず、人の心不定なり。物みな幻化なり。何事か」しはらくも住する。」此理をしらざるなり。吉日に悪をなすに必凶なり。悪日に善をおこなふにかならず吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず。

（五十二）　弓射るにもろ矢もつまじき事

ある人弓いる事をならふに、もろ矢をたはさ(挟)みて的に向ふ。師のいはく、初心の人、二つの矢をもつ事なかれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざ(等閑)りの心有り。毎度たゞ得失なく、此一箭に定べしと思へといふ。」わづかに二の矢師の前にて、一つをおろそかにせんと思はんや。げだい(懈怠)の心みづからしらずといへども、師是をしる。此いましめ万事にわたるべし。」道を學する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらん事を思ひて、かさねてねんごろ(懇)に修せん事を期せりいはんや。「一刹那の内において、懈怠の心あることをさらんや。なんぞたゞ今の一念において、たゞちにすることのはなはだかたき。」

（五十三）　牛をうる物の話

牛をうるものあり。かふ人あすそのあたひをやりて、牛をとらんといふ。夜のまに(間)牛しぬ。かはんとする人に利あり。うらんとする人に損ありと

かたる人あり。是をきゝて、かたへなるものゝいはく、牛のぬしまとに損ありといへども、又大なる利あり、其ゆゑは、生あるもの死のちかきとを、しらざると牛すでにしかなり。人又おなじ。ばからざるにうしは死し、ばからざるに主は存せり。一日の命万金よりもおもし。牛のあたひ鵝毛よりもかろし。万金をえて一錢をうしなはん人、損ありといふべからずといふに、みな人あざけりて、其理はうしのぬし(主)にかぎるべからずといふ。又いはく、されば人死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々にたのしまざらんや。愚なる人、此たのしひをわすれて、いたづか(頻)はしく、外の樂をもとめ、此たからをわすれて、あやふく他のたからをむさぼるには、志みつ事なし。いける間生をたのしまずして、死にのぞんで死をおそれは、此理有べからず。人みな生をたのしまざるは、死をおそれざるゆゑなり。死をおそれざるにはあらず、死のちかきとをわすれゝなり。もし又、生死の相にあ(與)づからずといはゞ、實の理をえたりといふべし、といふに人いよ〳〵あざける。

（五十四）勅書を持ちては下馬せざる事

ときは井の相國、出仕し玉ひけるに、勅書をもちたる北面あひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國後に、北面何がしは、勅書を持ながら、下馬し侍りし者なり。かほどのもの、いかでか君につかふまつり候べき、と申されければ、北面をば(故)なたれにけり。勅書を馬のうへながら、さゝげて見せ奉るべし。おるべからずとぞ。

（五十五）めなもみといふ草の事

めなもみ(蓍耳)といふ草あり。くち(嘘)はみにさゝれたる人、かの草をもみて付ぬれば、すなはちいゆとなん。見しりておくべし。

（五十六）任大臣の宣命を忘れたる話

ある人任大臣の節會の、内辨をつとめられけるに、内記のもちたる宣命をとらずして、堂上せられにけり。さはまりなき失禮なれども、立かへりとるべきにもあらず、思ひわづらはれけるに、六位外記康綱、きぬかつぎ(衣)の女はうをかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。

いみじかりけり。

（五十七）　忠守をなそ〳〵にせし話

大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞ〳〵をつくりてとかれける處へ、くず（葛）し忠守參りたりけるに、侍從大納言公明卿、わがてうのものとも見えぬたゞもりかな、となぞ〳〵にせられにけるを、唐瓶子ときて笑ひあはれけれは、腹だちてまか（退）り出にけり。

（五十八）　寸陰をしむべき事

寸陰をしむ人なし。これよくしれるか、愚なるか。愚にしておこたる人のためにいはゞ、一錢かろしといへども、是をかさぬれは、まづしき人をとめる人となす。されは商人の、一錢をしむ心切なり。せつな（刹那）覺えずといへども、是をは（運）こびてやまぎれは、命を終る期たちまちにいたる。されは道人は、とほく日月をしむべからず、只今の一念、むなしく過るとををしむべし。もし人來りて、我命あすは必うしなはるべし、とつけしらせたらんに、けふのくるゝ間、何事をか頼み、何事をかいとなまん。我らがいけるけふの日、なんぞ其時節にとなら（成）ん。一日のうちに、おん（飲）じき（食）、便利、睡眠、言語、行歩、やむことをえずして、おほくの時をうしなふ。其あまりのいとま、いくはくならぬうちに、むやくの事をなし、むやくのことをいひ、無益の事を思惟して、時をうつすのみならず、日を消し、月をわたりて、一生を送る尤愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心つねに風雲の思ひを觀ぜしかは、惠遠白蓮のまじはりをゆるさゞりき。しはらくも是なき時は、死人におなじ。光陰何のためにか（何）をしむ（惜）とならは、内に思慮なく、外に世事なくして、止まむ人はやみ、修ぜん人は修せよとなり。

（五十九）　高名の木のほりの話

高名の木のぼりといひしをのこ、人をおき（置）てゝ、たかき木にのぼせて、梢をきらせしに、いとあやうく見えし程は、いふこともなくて、おるゝ時に軒たけはかりになりて、あやまちすな心しておりよ、と詞をかけ侍しを、かはかりになりては、飛びおるゝともおりなん、いかにかくいふ（言）ぞと申侍しかは、其事に候、めくるめき、枝あやうきほどは、おのれがおそれ侍れ

は申さず、あやまちはやすき所になりて、必仕る事に候といふ。」あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所をけ出して、後やすく思へは、かならず落るとゝ侍るやらん。

（六十）　雙六の上手の人の話

雙六の上手といひし人に、其てだ（ガ技）てをとひ侍しかは、かたんとうつべからず、まけじとうつべきなり。いづれの手か、とくまけぬべきとあんじて、其手をつかはずして、一めなりとも、おそくまくべき手につくべしといふ。」みちをしれるをしへ、身ををさめ、國をたもたん道も、又しかなり。

（六十一）　圍碁雙六とのむまじき事

圍碁雙六好んであかしくらす人は、四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふ。」とある聖の申ししこと、耳にとゞまりていみじくおぼえ侍る。

（六十二）　さい王丸牛おふ話併太秦殿の女房の名

今出川のおほい殿（大臣）、さがへおはしけるに、ありす川のわたり（渡）に、水のながれたる所にて、さい王丸御牛をおふたりけれは、あぶきの水、前板までさゝとかゝりけるを、爲教、御車のしりに候ひけるが、希有の童かな。かゝる所にて、御牛をはおふ物かといひたりけれは、おほい殿（大臣）御氣色あしくなりて、おのれ車やらん事、さい王丸にまさりてえしらじ。希有の男なりとて、御車に頭を打あてられにけり。」此高名のさいわう丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。此うづまさ殿に侍りける女はうの名とも、一人はひさゝち、一人はとづち、一人ははうはら、一人はおとうしとつけられけり。

（六十三）　ぼろ〳〵の話

宿河原といふ所にて、ぼろ〳〵（虚無僧）おほくあつまりて、九品の念佛を申けるに、外より入くるぼろ〳〵の、もし此中に、いろをし坊と申すぼろや、おはします、」と尋ければ、其中よりいろをしゝに候。かくの給ふはたそと答ふれ、はしら梵字と申者なり。おのれが師何がしと申人、東國にて、いろをしと申すぼろにころされけり、と承りしかは、其人にあひ奉りて、恨申さはやと思ひて、尋申なりといふ。いろをしゆゝしくも尋おはしたり、さる事侍りき。こゝにて對面したてまつらは、道場をけがし侍るべし。前のか

はらへ参りあはん、あなかしこ、わきさしたち、いづかたをもみつぎ給ふ（助カ）な、あまたのわづらひにならは、佛事のさまたけに侍るべしといひ定めて二人河原へ出あひて、心行くはかりにつらぬきあひて、ともにしに〻けり。ぼろ〳〵といふもの、昔はなかりけるにや、ちかき世にぼろんじ、梵字、漢字、などいひける者、其はじめなりけるとかや。世をすてたるに似て、我執ふかく、佛道をねがふにして、闘諍をことゝす、放逸無慚の有様なれども、死をかろくして、少しもなづまざるかたの、いさぎよく覺えて、人のかたりしまゝに、かきつけ侍るなり。

（六十四）　名をつくる事はありのまゝにすへき事

寺院の號、さらぬよろづの物にも、名をつくる事、むかしの人はすこしもとめず。たゝ有のまゝに、やすく（安）つけけるなり。このごろはふかくあん（案）じ、さいが（學）くをあらはさんとしたるやうに聞ゆる、いとむつかし。人の名も、めなれぬ文字をつかんとする、えさなき事なり。何事もめづらしき事をもとめ、異説をとのむは、淺才の人のかならずある事なりとぞ。

（六十五）　友はえらぶへき事

友とするにわろき者七つ有り。一には高くやん（貴）となき人、二にはわかき人、三には病なく身つよき人、四には酒をこのむ人、五にはたけくい（武勇）さめる人、六にはそらごとする人、七には欲ふかき人。よき友三あり。一には物くるゝ友、二にはくすし（醫師）、三にはちゑある友。

（六十六）　鯉、雉、松茸、なとは殿上にも用ゐらるゝ事

鯉のあつものくひたる日は、びんそゝけずとなん。にかはにもつくるものなれは、ねはりたる物にこそ。こひはかりこそ御前にてもきらる（理斟）〻物なれはやんごとなき魚なれ、鳥には雉左右なきものなり。雉松茸なとは、御湯殿のうへにかゝ（掛）りたるもくるしからず、其外は心うき（憂）事なり。ちうぐうの御方の、御湯殿のうへのくろみ棚に、鷹の見えつるを、北山入道殿の御らんじて、かへらせ給ひて、やがて御文にて、かやうの物、さながら（其儘）其すがたにて、御たなにゐて（置）候ひしと、見なならはずさまあしき事なり。はか（有）〻しき人、さふらはぬゆゑにこそ、など申されたりけり。

（六十七）無用のものは渡來すへからさる事

唐の物はくすりのほかは、なくとも事かくまじ。書どもは、此國に多くひろまりぬれは、かきもうつしてん。もろとし舟のたやすからぬ道に、無用の物どものみとりつみて、所せくわたしもてくる、いとおろかなり。遠き物を寶とせずとも、又得がたきたからをたふとまずとも、と文にも侍るとかや。

（六十八）無益のものは養ひかふべからざる事

やしなひかう物には、馬牛つなぎくるしむこそいたましけれど、なくてかなはぬ物なれは、いかゝはせん。犬はまもりふせぐつとめ、人にもまさりたれは、必有べし。されど家ごとに有る物なれは、とさらにもとめかはずとも有なん。其外の鳥けだもの、すべて。用なき物なり。ぱしるけだものはをりにこめ、くさりをさゝれ、とぶ鳥はつはさをきり、籠に入れられて、雲をこひ、野山をおもふうれへやむ時なし。其思ひ我身にあたりて、忍びがたくは、心あらん人とれをたのしまんや。生をくるしめて、目をよろこはしむるは桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林にたのしぶをみて、せうえうの友としき。とらへくるしめたるにあらず。凡めづらしき禽、あやしきけだもの、國にやしなはずとこそ文にも侍るなれ。

（六十九）藝能もさして用なきは習すともよき事

人の才能は、文あきらかにして、ひじりのをしへをしれるを第一とす。つぎには手かく事、むねとする事はなくとも、是をならふべし。學問にたよりあらんためなり。つぎに醫術をならふべし。身をやしなひ人をたすけ、忠孝のつとめも、醫にあらずは有べからず。次に弓射、馬にのる事、六藝に出せり。かならず是をうかがうべし。文武醫の道、誠にかけては有べからず。是をまなはんをは、いたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味をとゝのへしれる人、大なる德とすべし。つぎに細工よろづに要多し。此外の事ども、多能は君子のはづるところなり。詩歌にたくみに、糸竹にたへなるは、幽玄の道、君臣これをおもくすといへども、今の世にはこれをもちて、世ををさむる事、やうやくおろかなるにたり。金は

すぐれたれども、くろがねの益おほきにしかざるがごとし。

（七十）　無益の事をなして時を移すべからずとの事

無益の事をなして、時をうつすを、愚なる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため君のためにやむことを得ずして、なすべき事多し。そのあまりのいとま、いくばくならず思ふべし。人の身にやむ事をえずして、いとなむ所、第一に食物、第二にきる物、第三に居所なり。人間の大事此三には過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨におかされずして、しづかにすぐすをたのしみとす。たゞし人皆病あり。病におかされぬれば、其うれへ忍びがたし。醫療をわするべからず。藥をくはへて、四のともとめえざるをまづしとす。此四かけざるをとめりとす。此四の外をもとめいとなむをおごりとす。四の事儉約ならば、たれの人かたらずとせん。

（七十一）　佛事にある聖を請したる話

人におくれて、四十九日の佛事に、あるひじり（聖僧）を請じ侍しに、說法いみじくして、みな人なみだをながしけり。導師かへりて後、聽聞の人ども、いつよりもとにけふは、たふとく覺え侍りつる、と感じあへりし返事に、ある者のいはく、何とも候へ、あれほど唐の狗に似候なんうへは、といひたりしに、哀もさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうやは有るべき。又人に酒すゝむるとて、おのれまづたべて（飲）、人にしひ奉らんとするは、劍にて人をきらんとするにたる事なり。二方に刄つきたる物なれば、もたぐる時、まづわがかしらをきるゆゑに、人をはえきらぬなり。おのれまづゑひてふしなば、人はよもめさじ（飲）と申しき。劍にてきりとゝろみたりけるにや、いとをかしかりき。

（七十二）　益なき事は改むべからざる事

あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするなり。

（七十三）　すべて生ある物をそこなふべからずとの事

雅房大納言は、才かしこくよき人にて、大將にもなさばやとおぼしける比、院の近習なる人、たゞ今あさましき事を、み侍りつと申されければ、何事ぞととはせ給ひけるに、雅房卿鷹にかはんとて、生たる犬の足をきり

侍りつるを、中垣のあなより見侍つと申されけるに、うとましくに(憎)くゝおぼしめして、日ごろの御氣色もたがひ、昇進もし玉はざりけり」さはかりの人、たかをもたれたりけるは思はずなれど、犬のあしはあど(虚言)なきとなり。そらごと(虚言)は不便なれども、かゝるときかせ給ひて、にくませ給ひける君の御心は、いとたふときとなり」大かたいける物をころし、いためたゝかはしめて、あそびたのしまん人は、畜生殘害のたぐひなり。よろづの鳥けだものちひさき虫までも、心をとめて有樣をみるに、子を思ひ、親をなつかしくし、ふうふをともなひ、ねたみいかり、欲多く身を愛し、命を惜めるとひとへに愚癡なるゆゑに、人よりもまさりて甚し。かれにくるしみをあたへ、命をうばはんと、いかでか(痛)いたましからざらん。すべて一切の有情をみて、じひ(慈悲)の心なからんは人倫にあらず。

(七十四) 人をくるしめ物をしひたぐましき事

顔回は、こゝろざし人に勞をほどこさじとなり。すべて人をくるしめ物をしひ(虐)たぐる事、いやしき民のこゝろざしをもうばふべからず」又いときなき子をすかし(賺)おどし(嚇)、いひはづかしめて興ずる事あり。おとな(大人)しき人は、まことならねば、とにも(何事)あらず思へど、をさなき心には、身にしみて、おそろしく、はづかしくあさましき思ひ、まことに切なるべし。是をなやまして興ずる事、じひの心にあらず」おとなしき人の、よろこびいかり、哀びたのしぶも、皆虚妄なれども、たれか實有の相に着せざる。身をやぶ(破)るより も、心をいたましむるは、人をそこな(害)ふことなほはなはだし。病をうくる事も、おほくは心よりうく。外より來る病はすくなし、くすりをのみて汗をもとむるには、しるし(効能)しなき事あれども、一旦はちおそるゝ事あれば、かならずあせをながすは、心のしわざなり、といふとをしるべし。」凌雲の額をかきて、白頭の人となりしためし(例)しなきにあらず。

(七十五) 物にあらそはざる事

物にあらそはず、おのれをまげ(枉)て人にしたがひ、わが身を後にして、人を先にするにはしかず」よろづのあそびにも勝負をこのむ人は、かちて興あらんためなり。おのれが藝のまさりたる事をよろこぶ。されば、まけて

けうなくをぼゆべき事、又しられたり。わがまけて人をよろこばしめんと思はゞ、さらにあそびの興なかるべし。人にほいなく思はせて、わが心をなぐさめんと徳にそむけり」むつましき中に、たはぶるゝも、人をはかりあざむきて、おのれが智のまさりたるとを興とす。是又禮にあらず。されははじめ興宴よりおこりて、ながきうらみをむすぶたぐい多し。是皆あらそひをこのむ失なり」人にかたんとを思はゞ、たゞ學問して、其智を人にまさらんと思ふべし。道をまなぶとならは、善にほこらず、輩にあらそふべからず、といふとを知るべき故なり。大なる職をも辭し、利をも捨るは只學問の力なり。

（七十六）人は其分際を知るべき事

まづしき者は財を持て禮とし、老たる者は力をもつて禮とす。おのが分をしりて、及はざる時は、すみやかにやむを智と云ふべし。ゆるさざらん人のあやまりなり。分をしらずしてしひてはげむは、おのれがあやまりなり。まづしくて分をしらざれは盗み、ちからおとろへて分をしらざれは病をうく。

（七十七）夜のおとゞは東御枕の事

夜のおとゞは、東御枕なり。大かた東を枕として、陽氣をうくべきゆへに、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕常の事なり、白川院は北首に御寢なりけり。北はいむとなり。又いせはみなみなり。太神宮の御方を、御跡にせさせ玉ふといかゞと人申けり。但太神宮の遙拜は、たつみにむかはせ給ふみなみにはあらず。

（七十八）人はおのれを知るを第一とする事

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふ者、ある時鏡をとりて、かほをつくゝと見て、我かたちのみにくゝあさましきとを、あまりに心うく覺えて、鏡さへうとましき心ちしければ、其後ながく鏡をおそれて、手にだにとらず、さらに人にまじはる事なし。御堂のつとめはかりにあひてこもりゐたり、と聞き侍しこそ有がたく覺えしが、かしこけなる人も、人のうへをのみはかりて、おのれをはしらざるなり。我をしら

ずして、外をしるといふとわり有べからず。されはおのれをしるを、ものしれる人といふべし」かたちみにくけれどもしらず、心のおろかなるをもしらず、藝のつたなきをもしらず、身の數ならぬをもしらず、年の老ぬるをもしらず、病のおかすをもしらず。死のちかき事をもしらず、おこなふ道のいたらざるをもしらず、身のうへの非をしらねは、ましてほかのそしりをしらず。」たゞしかたちは鏡にみゆ、年はかぞへてしる、我身の事しらぬにはあらねど、すべき方のなければ、しらぬにたりとぞいはまし」かたちをあらため、よはひをわかくせよとにはあらず。つたなきをしらは、なんぞやがてしりぞかざる。老ぬとしらは、なんぞしづかに身をやすくせざる。行愚なりとしらは、なんぞ是を思ふと是にあらざる」すべて人に愛樂せられずして、衆にまじはるははちなり。かたちみにくゝ、心おくれにして出でつかへ、無智にして大才にまじはり、不堪の藝をもちて堪能の座につらなり、雪のかしらをいたゞきてさかりなる人にならび、いはんや及はざるとをのぞみ、かなはぬ事をうれへ、きたらざるとをまち、人におそれ、人に媚るは、人のあたふる耻にあらず。むさぼる心にひかれて、みづから身をはづかしむるなり」むさぼるとのやまざるは、命をおふる大事、今こゝに來れりと、たしかにしらざればなり。

（七十九）　人にほとるべからざる事

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將にあひて、わねしのとはれんほどの事、何事なりともこたへ申さらんや」といはれければ、具氏いかゞ侍らん、と申されけるを、さらはあらがひ給へといはれて、はかゝしき事は、かたはしもまねびしり待らねは、たづね申までもなし。何となきそゞろごとの中に、おぼづかなきとをこそとひたてまつらめ、と申されけり。ましてこゝもとのあさきとは、何事なりともあきらめ申さんといはれければ、きんじゆの人々、女房なども興あるあらがひなり、おなじくは御前にてあらそはるべし、まけたらん人は供御をまうけらるべしとさだめて、御まへにてめしあはせられたりけるに、具氏をさなくよりきゝならひ侍れど、その心しらぬと侍り」馬のきつりやうきつにの

をかながくぼれいりくれんどう、」と申事はいかなる心にか侍らん、うけ給ばらんと申されけるに、大納言入道はたとつまりて、是はそゞろごとなれはいふにもたらずといはれけるを、もとよりふかき道はしり侍らず、そゞろごとをたづねたてまつらんとさため申しつと申されけれは、大なごん入道まけになりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

（八十）　鹽の字を土篇なりといひたりし話

くすし（醫師）あつしけ、故法皇の御前にさふらひて、供御のまゐりけるに、今まゐり侍る、供御のいろ〳〵（品々）を、文字も功能もたつね下されて、そらに申侍らは、本草に御らんじあはせられ侍れかし、ひとつも申あやまり侍らじとぞ申ける、時しも六條故内府まゐり給ひて、有房ついでに物ならひ侍らんとて、まづしほといふもじは、いづれの篇にか侍らん、ととはれたりけるに、土篇に候と申したりけれは、才のほどすでにあらはれにたり。今はさはかりにて候へ、ゆかしきところなしと申されけるに、どよみになりてまかりいでにけり。

（八十一）　家にありたき草木の事

家に有たき木は、松、さくら、松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八重櫻はならの都にのみ有りけるを、此ごろぞ世におほくなり侍るなる。吉野の花、左近のさくら、みなひとへにてこそあれ。八重櫻はとやう（樣）の物なり。いとこちたくねぢけたり（屈曲）。うゑずとも有なん。おぞさくら又すさまじ（不興）。虫のつきたるもむつかし（見苦）。梅はしろきうす紅梅、ひとへなるがとく咲たるも、かさなりたる紅梅の匂ひめでたきも皆をかし。おそき梅は、櫻に咲きあひて、覺えおとり（劣）けおされ（壓）て、えだにしぼみつきたる心うし。ひとへなるがまづさきてちりたるは、心とくをかし、とて京極入道中納言は、猶ひとへ梅をなん、軒ちかくうゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめり。柳又をかし。卯月はかりのわかか（葉）へで、すべて萬の花もみちにも、まさりてめでたき物なり。たちはな、かつら、いづれも木は物ふり大きなるよし。草は山吹、藤、かきつはた、なでしこ、池にはは（蓮）ちす、秋の草は荻、薄、きちかう、萩、女郎花、ふぢはかま、しをに、われもかう、かるかや、りんだう、

きく、黄菊も、つた、くず、朝顔、いづれもいとたかからず、さゝやかなる垣にしげからぬよし。此外の世にまれなる物、からめきたる名の聞にくゝ、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。「大かたなにもめづらしく、有がたきものは、よか人らぬ人のもて興ずるものなり。さやうのものなくてありなん。

（八十二）無用の物はもつまじき事

身死して財のとる事は、智者のせざるところなり。よからぬ物たくはへおきたるもつたなく、よきものは心をとめ留けんとはかなし。こちたく多ほかる、ましてくちをし。我こそえめなどいふものどもありて、あとに死後あらそひたるさまあし。後はたれにとゝろさす物あらは、いけらんうち生にぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらん物こそあらめ。其外は何もたでぞあらまほしき。

（八十三）あらえびすの名言

心なしとみゆるものも、よき一言はいふものなり。「あるあらえびすのお荒夷そろしげなるが、かたへの人にあひて、御子はおはすやとひしに、ひとりもち侍らずとこたへしかは、さては物の哀はしり給はじ、情なき御心にぞものし給ふらんといとおそろし。子ゆゑにこそ萬のあはれは思ひしられ、といひたりき、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝるものゝ心に慈悲ありなんや。孝養の心なきものも、子もちてこそ、親のこゝろざしは思ひしるなれ。「世をすてたる人の、よろづにすること匹如身なるが、なべてほだし絆おほかる人の、萬にへつらひ望ふかきをみて、無下に思ひくたす腐はひがごとなり。其人の心になりて思へは、まとにかなしからん、おやのため妻子のためには、耻をもわすれ、盗もしづべき事なり。されは盗人をいましめ、ひがごと偉事をのみつみせんよりは、世の人のうゑずさむからぬやうに、世をはおこなはまほしきなり。人つねの産なき時は、つねの心なし、人きはまりてぬすみす、世をさまらずして凍餒のくるしみあらは、科の者たゆべからず。人をくるしめ、法をおかさしめて、それをつみなはん事不便のわざなり、「さていかゞして、人をめぐむべきとなら

は、上のおごりついやす所をやめ、民をなで農をすゝめは、下に利あらん事うたがひ有べからず。衣食よのつねなるうへに、ひがとせん人をぞまとのぬす人といふべき。

（八十四）人の終焉のありさまなどいふまじき事

人の終焉の有さまの、いみじかりし事など、人のかたるをきくに、たゞしづかにしてみだれずといはゞ、心にくかるべきを、おろかなる人は、あやしくことなる相をかたりつけ、いひしことはもふるまひも、おのれがとのむかたにほめなすこそ、其人の日ごろの本意にもあらずやとおぼゆれ。此大事は權化の人もさだむべからず、博學の士もはかるべからず。おのれたがふところなくは、人の見きくにはよるべからず。

（八十五）信願桃尻の事

御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、落馬の相ある人なり、よく〳〵つゝしみ給へといひけるを、いとまとしからず思ひけるに、信願馬よりおちて死にけり、道に長じぬる一言神のごとしと人思へり。さていかなる相ぞと人のとひければ、きはめてもゝじりにして、沛艾の馬をこのみしかば、此相をおふせ侍りき。いつかは申あやまりたるとぞいひける。

（八十六）明雲座主相者にあひし事

明雲座主、相者にあひ給ひて、おのれもし兵杖の難やあるとたづね給ひければ、相人まことにその相おはしますと申す、いかなる相ぞとたづね給ひければ、傷害のおそれおはしますまじき御身にて、かりにもかくおぼしよりて、尋ね給ふ。是すでに其あやふみのきざしなり。と申しけり。はたして矢にあたりてうせ給ひにけり。

（八十七）鹿茸を鼻にあつべからざる事

鹿茸を鼻にあてゝ、かくべからず。ちひさきむしありて、はなより入りて腦をばむといへり。

（八十八）能をつかんとする人の心得

能をつかんとする人、よくせざらんほどは、なまじひに人にしられじ。うち〳〵よくならひえて、さし出でたらんこそいと心にくからめ、とつね

にいふめれど、かくいふ人一藝もならひうる事なし、いまだ堅固かたほ(片輔)なるより、上手の中にまじりて、そしりわらはるゝにも耻ぢず、つれなくすぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまずみだりにせずして、年をおくれば、堪能のたしなまざるよりは、つひに上手の位にいたり、徳たけ人にゆるされて、雙なき名をうるとなり。「天下のものゝ上手といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾も有りき。されども其人、道のおきてたゞしく、是をおもくして、放埒せざれば、世のはかせにて、萬人の師と成る事、諸道かはるべからず。

（八十九） 徳不徳は老若によらざる事

西大寺靜然上人、こしかゞまり眉しろく、まとにとくたけたる有さまにて、だいりへ參られたりけるを、西園寺内大臣殿、あなたうとのけしきやとて、信仰のきそく(色紙)有りければ、資朝卿これをみて、年のよりたるに候と申されけり。後日にむく犬のあさましく老さらぼひて、毛はげたるをひかせて、此けしきたふとく見えて候とて、内府へ參らせられたりけるとぞ。

（九十） 資朝とらはれ人を見てうらやみし事

爲兼大納言入道、召とられて武士どもうちかこみて、六波羅へゐて行けれは、資朝卿一條わたりにて是をみて、あなうらやましゝ、世にあらん思ひでかくこそ、あらまほしけれ、とぞいはれける。

（九十一） 資朝東寺の門にてかたわ物を見し話

此人東寺の門に、雨やどりせられたりけるに、かたわものどものあつまりゐたるが、手も足もねぢゆ(屈曲)がみうちかへりて、いづくも不具にとやうなるをみて、とり〳〵にたゞひなきくせものなり。もつとも愛するにたれりと思ひて、まもりゐけるほどに、やがてけうつきて、見にくゝいふせくおぼえけれは、たゞすなほに、めづらしからぬ物にはしかずと思ひて、かへりて後、此間ゐる木をこのみて、とやうに曲折あるをもとめて、目をよろこばしめつるは、かのかたわものを愛するなりけり、と興なくおぼえけれは、鉢にうゑられける木ども、みなほりすてられにけり。さも有り

ぬべき事なり。

（九十二） 人は機嫌を知るべき事

世にしたがはん人は、まづ機嫌をしるべし。ついであしき事は、人の耳にもさかひ、心にもたがひて其事ならず。さやうの折ふしを心得べきなり」但病をうけ、子うみ死ぬるとのみ、機嫌をはからず、ついであしとてやむとなし。生住異滅のうつりかはる實の大事は、たけき河のみなぎりながるゝがごし。しばしもとゞこほらず、たゞちにおこなひゆくものなり」されば眞俗につけて、かならずはたしとげんと思はん事は、機嫌をいふべからず。とかくのようなく、足をふみとゞむまじきなり。春くれて後夏になり、夏はて〻秋のくるにはあらず。春はやがて夏の氣をもよほし、夏よりすでに秋はかよひ、秋はすなはちさむくなり、十月は小春の天氣、草もあをくなり、梅もつぼみぬ。木葉のおつるも、まづおちてめぐむにはあらず、下よりきざしつはるにたへずしておつるなり。むかふる氣下にまうけたるゆゑに、まちとるついで甚はやし。生老病死のうつり來る事、又是にすぎたり。四季は猶さだまれるついで有り、死期はついでをまたず、死は前よりしもきたらず、かねてうしろにせまれり。人みな死ある事をしりて、まつとしかも急ならざるに、おぼえずして來る。おきのひかたはるかなれども、磯よりしほのみつるがごし。

（九十三） 大饗はさるべき所を申うけてすべき事

大臣の大饗は、さるべき所を申うけておこなふつねの事なり。宇治左大臣殿は、東三條殿にておこなはる。内裏にて有りけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させるとのよせなけれども、女院の御所などかり申す故實なりとぞ。

（九十四） 心は必ず事にふれて來る事

筆をとれば物かゝれ、樂器をとれば音をたてんと思ふ。盃をとれば酒を思ひ、さいをとれば攤うたん事を思ふ。心はかならず事にふれてきたる。かりにも不善のたはふれをなすべからず」あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文もみゆ。そつじにして、多年の非をあらたむる

事も有り。かりに今此文をひろけざらましかは、此事をしらんや。是すなはちふるゝ所の益なり。心さらにおこらずとも、佛前に有てずゞをとり、經をとらはおこたるうちにも、善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せは、おぼへずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相もしそむかざれは、內證かならず熟す。しひて不信といふべからずあふぎてこれをたふとむべし。

（九十五）承仕法師鳥を打ところしたる話

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日ごろかひつけて、堂の內まで餌をまきて、戸ひとつあけたれは、數もしらず入りこもりける後、おのれもいりて、たてこめてとらへつゝころしけるよそほひ、おどろ〳〵しく聞えけるを、くさかるわらはきゝて人につげけれは、むらのおのこども、おこりて入りて見るに、大鴈ともふためきあへる中に、法師まじりて、打ちふせねちころしけれは、此法師をとらへて、所より使廳へ出したりけり。ころす所の鳥をくびにかけさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言別當の時になんはべりける。

（九十六）無益の談はすへからざる事

世の人あひあふ時、しはらくもだしすろことなし。かならずことはあり、其ことはをきくに、おほくは無益の談なり。世間の浮說、人の是非、自他のために失おほくとくすくなし。是をかたる時、たがいの心に無益の事なり、いふことをしらず。

（九十七）人と爭ひ物にほこるべからざる事

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろにのぞみて、あはれわが道ならましかは、かくよそに見侍らじ物をといひ、心にも思へることつねのことなれど、よにわろく覺ゆるなり。しらぬ道のうらやましく覺えは、あなうらやましなどかならはさりけんといひてありなん。我智をとりいで、人にあらそふは、つのあるものゝ角をかたふけ、きはあるものゝきはをかみいだすたぐいなり。人としては善にほこらず、物とあらそはざるをとくとす。他にまさることのあるは、大なる失なり。しなのたかきにても、

才藝のすくれたるにても、先祖のほまれにても、人にまさりと思へる人は、たとひことはにいでこそいはねども、内心にそこばくのとがあり。つゝしみてこれをわするべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、わざはひをもまねくは、たゞこのまんしんなり。一道にもまことに長しぬる人は、みづからあきらかに其非をしるゆゑに、こゝろざしつねにみたずして、つひにものにほこることなし。

（九十八）多言は失を招くの本なる事

年おひたる人の一事すぐれたる才能ありて、此人の後には、誰にかとはんなどいはるゝは、老のかたうどにて、いけるもいたづらならずさはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生此事にてくれにけり、とつたなくみゆ。今はわすれにけり、といひてありなん。大かたはしりたりとも、ずゝろにいひちらすはさはかりの才にはあらぬにや、と聞え、おのづからあやまりもありぬべし。さだかにもわきまへしらずなどいひたるは、猶まことに道のあるじとも覺えぬべし、まして知らぬことを、したりがほに

おとなしくもどきぬべくも、あらぬ人のいひきかするを、さもあらずと思ひながらきゝゐたる、いとわびし。

（九十九）阮籍が青眼たれもあるべき事

さしたることなくて、人のがり行はよからぬことなり。用ありて行たりとも、其事はてゝなほとくかへるべし。久しくゐたるいとむづかし、人とむかひたれば、ことはおほく身もくたびれ、心もしづかならず。萬の事さはりて時をうつす、たがひのため益なし。いとはしげにいはんもわろし、心づきなきことあらんをりは、中々そのよしをもいひてん。同じ心にむかはまほしく思はん人の、つれ〳〵にて今しはし、けふは心しづかになどいはんは、此かぎりにはあらざるべし。阮籍か青眼たれもあるべき事なりそのことなきに、人のきたりて、のとかに物かたりして、かへりぬるいとよし。また文も久しく聞えさせねばなどはかり、いひかこせたるいとうれし。

（百）好事を行じて前程を問ふべからざる事

貝をおほふ人の、我まへなるをはおきて、よそを見わたして、人の袖のかげ、ひざの下までめをくばるまに、前なるをは人におほはれぬ。よくおほふ人は、よそまでわりなくとるとは見えずして、ちかきはかりおほふやうなれと、おほくおほふなり。碁盤のすみに、石をたてゝはじくに、むかひなる石を、まもりてはじくはあたらす。わが手もとをよくみて、こゝなるひじりめをすぐにはじけは、たてたる石かならずあたる。よろづの事、外にむきてもとむへからず。只こゝもとをたゞしくすべし。清獻公がことはに、好事を行じて、前程をとふとなかれといへり。世をたもたん道もかくや侍らん。うちをつゝしまず、かろくほしきまゝにして、みだりなれは遠國かならずそむく時、始てはかりことをもとむ。風にあたり、濕にふして、病を神靈にうたふるは愚なる人なり、と醫書にいへるがごとし。目のまへなる人の、愁をやめ、惠をほどこし、道をたゞしくせは、其化とほくなかれんことをしらざるなり。禹の行て三苗を征せしも、いくさをかへして、德をしくにはしかざりき。

（百一）身をあやまつは若き時なれは謹むべき事

わかき時は、血氣うちにあまり、心物にうごきて情欲おほし。身をあやふめて、くたけやすき事、たまをはしらしるに似たり。美麗をこのみて實をついやし、是をすてゝ苔のたもとにやつれ、いさめる心さかりにして、物とあらそひ、心に耻うらやみ、このむ所日々にさだまらず、色にふけり情にめで、行をいさぎよくして、百年の身をあやまり、命をうしなへるたゝしねかはしくして、身のまたく久しからん事をは思はず、すけるかたに心ひきて、ながき世がたりともなる。身をあやつることはわかき時のしわさなり。老ぬる人は精神おとろへ、あはくおろそかにして、感じうこく所なし。心おのづからしづかなれは、無益のわさをなさず、身をたすけてうれへなく、人のわづらひなからん事を思ふ。老て智のわかき時にまされる事、わかくしてかたちの、老たるにまさされるがごとし。

（百二）人に酒をすゝむるはあしき事

世には心えぬことのおほきなり。ともあるごとには、先酒をすゝめて、し

ひのませたるを興とする事、いかなるゆゑとも心えず。」のむ人のかほいとたへがたけに、眉をひそめ（顰）、人めをはかりてすてんとし、にげんとするをとらへて、引とゞめてすゞろにのませつれば、うるはしき（端正）人もたちまちに、狂人となりてをこがましく、息炎なる人も、めのまへに大事の病者となりて、前後もしらすたふれふす、いはふへき（祭）日などは淺ましかりぬべし。あくる日までかしらいたく（頭）、物くはすにより（呻吟）ひふし、生をへたてたるやうにて、きのふの事おほえず。おほやけわたくしの大事をかきて、わづらひとなる。人をしてかゝるめを見する事、じひもなく禮義にもそむけり。かくからきめにあひたらん人、ねたく（妬）口をしと思はさらんや。人の國にかゝるならひあり（有）なりと。これら（我輩）になき人ととにて、つたへきゝたらんは、あやしくふしぎにおほえぬべし。」人のうへにて見たるだに心うし（悪）、思ひ入たるさまに、心にくしと見し人も、思ふ所なくわらひのゝしり（嘲）、ことはおほく、烏帽子（えぼうし）ゆかみひも（紐）はづし、ぼ（解）きたかくかゝけて、よういなき氣色、日ころの人ともおほえず、女はひたひがみは（晴れらかにかきやり、ま

はゆからず顔うちさゞけて打わらい。盃もてる手にとりつき、よからぬ人は、さかなとりて口にさしあて、みつからもくひたるさまあし。こゝのかぎり出して、おの〳〵うたひまひ、年老たる法師めしいだされて、くろくきたなき身をかたぬきて、目もあてられすすりたるを、興しみる人さへうとましくゝくし。あるはまた我身いみじきことゞも、かたはらいくいひきかせ、あるは醉なきし。（下等）さまの人はのり（乗）あひいさかひ（喧嘩）て、あさましくおそろしく耻がましく、こゝろうき事のみありて、はてはゆるさぬ物どもおしとりて、えん（椽）よりおち、馬、車よりおちてあやまちしつ。物にものらぬきば（分際）ゝ、大路をよろほひ行て、ついぢ、門の下などにむきて、元もいはぬことゞもしちらし。年老けさかけたる法師の、小童のかたをおさへて、聞えぬことゞもいひつゝ、よろめきたるいとかはゆし。かゝることをしても、此世ものちの世も、益あるへきわざならばいかゞはせん。」此世にはあやまちおほく、財をうしなひ病をまう、く。百藥の長とはいへど、萬の病は酒よりこそおこれ。うれへをわするとはいへど、ゑひたる人ぞ、

すぎにしうさをも思ひ出てなくめる。後の世は人の智慧をうしなひ、善根をやくことと火のことくして悪をまし、よろづの戒をやぶりて地獄におつべし。酒をとりて人にのませたる人、五百生が間手なきものに生るゝとこそ、ほとけはとき給ふなれ。

（百三）殿上黒戸の事

黒戸は小松御門位につかせたまひて、昔たゝ人におはしましゝとき、さなことせさせたまひしを、わすれ給はで、つねにいとなませたまひしまなり。みかま木にすゝけたれば。黒戸といふとぞ。

（百四）かわき砂の名言

鎌倉の中書王にて、御まりありけるに、雨ふりて後いまた庭のかわかざりければ、いかゞはせんとさたありけるに、佐々木隠岐入道のこぎりのくづを車につみて、おほく奉りたりければ、一庭にしかれて、泥土のわづらひなかりけり。とりためけんよういありがたし、と人感しあへりけり。此ことをあるものゝかたりいでたりしに、吉田中納言の、かはきすなこの用意やはなかりけると、のたまひたりしかは、はづかしかりき。いみしとおもひけるのこきりのくづ、いやしくことやうの事なり。庭の儀を奉行する人、かわきすなこをまうくるは、故實なりとぞ。

（百五）那蘭陀寺大門の事

入宋の沙門道眼上人、一切經をじらいして、六波羅のあたりやけ野といふ所に安置して、ことに首楞嚴經を講じて、那陀蘭寺と號す。其ひじりの申されしは、那蘭陀寺は大門北むきなり、と江帥の説としていひつたへたれど、西域傳、法顯傳などにも見えず、更に見所なし。江帥はいかなる才覺にてか申されけん、おぼつかなし。唐土の西明寺はきたむき勿論なりと申き。

（百六）わるき獣はかふべからぎる事

人つく牛をは角をきり、人くふ馬をは耳をきりて、其しるしとす。しるしをつけずして人をやふらせぬるは、ぬしのとがなり。人くふ犬をはやしなひかふへからず。是みなとがあり、律のいましめなり

（百七）　松下彈尼時頼を諷せし話

相模守時頼の母は、松下彈尼とぞまをしける。守をいれ申さるゝことありけるに、すゝけたるあかりさうじ（障子）のやふれはかりを、彈尼手づから小刀して、きりまはしつゝはられければ、せうと（兄人）の城介義景、其日のけいめ（經營）いして候ひけるが、たまはりて何がし男にはらせ候はん、さやうの事に心得たるものに候ふ、と申されければ、其男あまが細工によもまさり侍らじと（て）、猶ひとまづゝはられけるを、義景みなをはりかへ候はんは、ゝるかにたやすく候へし、またに（疑）候もみくるしくやと、かさねてまをされければ、あまも後はさは〳〵とはりかへんと思へども、けふはかりは故障わざとかくてあるべきなり。物はやふれたる所はかりを修理してもちふる事ぞと、わかき人に見ならはせて、心づけんためなり、と申されける。いとありがたかりけり。世をゝさむる道、儉約をもとゝす。女性なれとも聖人の心にかよへり。天下をたもつ（保）ほとの人を、子にもたれける、誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。

（百八）　名人の用意ふかき事

城陸奥守泰盛は、さうなき（無双）馬乗なりけり。馬を引出させけるに、足をそろへて、しきみ（関）をゆらりとこゆるをみては、是はいさめる馬なりとて、くらをおきかへさせけり。またあしをのべて、しきみにけあてぬれは、是はにくし（憎）とてあやまちあるべし、とてのらざりけり。道をさらざらん人、かはかりおそれなんや。

（百九）　同上

吉田とまをす、馬のりのまをし侍りしは、馬ことにことはき（躁）ものなり、人のちからあらそふへからずとしるへし。のるべき馬をはよくみて、つよき所よわきところをしるべし。次にくつわくらの具に、あやふきことやあるとみて、此にかゝることあらは、其馬をは（鞍）すべからず。此用意をわすれざるを、馬のりとは申なり。これひさう（秘蔵）の事なりとまをしき。

（百十）　能不能は勤むると勤めざるとにある事

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならふ

時、かならずまさることは、たゆみなくつゝしみて、かろ〳〵しくせぬと、ひとへに自由なるとのひどしからぬなり。藝能しよさのみにあらず、大かたのふるまひ心つかひも、おろかにしてつゝしめるは、得の本なり。たくみにしてほしきまゝなるは、失のもとなり。

（百十一）おのが爲さんとする事は專一にすへき事、

ある者子を法師になして、學問さて因果の理をもしり、說經などして世わたる、たづきともせよといひければ、をしへのまゝに、說經師にならんために、まづ馬にのりならひけり。輿、車、もたぬ身の導師に請せらん時、馬などむかへにおこせたらんに、もゝしりにておちんは心うかるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒などすゝむることあらんに、法師の無下に能なきは、擅那すさまじく思ふべし、とて早歌といふことをならひけり。ふたつわざやう〳〵さかひにいりければ、いよ〳〵よくしたくおぼえて、たしなみけるほどに、說經ならふべき隙なくて年よりにけり。此法師のみにもあらず、世間の人すべて此事あり。わかきほどは諸事につけて、身をたて大なる道をもなし、能をもつき學問をもせんと、行末ひさしくあらますことゞも、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、打おこたりつつ、まづさしあたりたる、めのまへのことにのみまぎれて、月日をおくれば、ことゝになすことなくして身は老ぬ、つひにものゝ上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、くゆれともとりかへさるゝよはひならねば、はしりて坂をくたる輪のごとくに、おとろへ行く。されば一生のうちむねと、あらまほしからんとの中に、いづれかまさるとよく思くらべて、第一の事をあんじさだめて、其外は思ひすてゝ、一事をはげむべし。一日の中一時のうちにも、あまたのことのきたらん中に、すこしも益のまさらんことをいとなみて、其外をはうちすてゝ大事をいそぐべきなり。いづかたをもすてじ、と心にとりもちては、一事もなすへからず。たとへは碁をうつ人、一手もいたつらにせず、人にさきだちて、小をすて大につくがことし。それにとりて三の石をすてゝ、十の石につくことはやすし。十をすてゝ十一につく事はかたし。ひとつなりともまさらんかたへこ

そつくべきを、十までなりぬれはをしく覺えて、おほくまさらぬ石にはかへにくし。これをもすてず、かれをもとらんと思ふ心に、かれをもえす是れをも、うしなうべきみちなり。京にすむ人、いそぎて東山に用ありて、すでにゆきつきたりとも、西山に行て、其益まさるべきことを思ひえたらば、門よりかへりて西山へゆくべきなり。こゝまできつれは、此ことをまづいひてん。日をきらぬことなれは、西山の事はかへりて、又こそ思ひたゝめ、とおもふゆゑに、一時の懈怠すなはち、一生のけたいとなる、是を恐るべし。一事をかならずなさんとおもはゝ、他のことのやぶるゝをもいたむべからず、人のあざけりをも耻べからず、萬事にかへずしては、一の大事なるべからず。人のあまたありける中にて、ある者ますほのすゝき、まそほのすゝきなといふことあり、わたのべの聖、このことをつたへしりたりとかたりけるを、登蓮法師そのざに侍りけるがきゝて、雨のふりけるに、みのかさやあるかしたまへ、かのすゝきのことならひに、わたのべのひじりのがり、たづねまからんといひけるを、あまりに物さわがし、雨やみてとそと人のいひけれは、無下のことをおほせらるゝものかな、人の命は雨のはれまをもまつものかは、我もしにひじりもうせは、たづねきゝてんやとて、ばしり出てゆきつゝならひ侍りにけり。と申つたへたるこそ、ゆゆしくありかたうおほゆれ。ときゝときは則こうありとぞ、論語といふ文にも侍るなる。此すゝきをいふかしく思ひけるやうに、一大事のいんえんをぞ思ふべかりける。

（百十二）　ものは不定なる事

今日はそのことをなさんとおもへど、あらぬいそぎまづいできて、まぎれくらし。まつ人はさはりありて、たのめぬ人はきたり。頼みたるかたのことはたがひて、思ひよらぬ道はかりはかなひぬ。わづらはしかりつることとはことなくて、やすかるべきことはいと心ぐるし。日々に過きゆくさまかねて思ひつるにはにず。一年のうちもかくのごとし。一生のあひだもまたしかなり。かねてのあらまし、みなたがひゆくかと思ふに、おのづからたがはぬ事もあれは、いよ〳〵ものは定がたし。不定と心えぬる

のみまことにてたがはず。

（百十三）　くらき人の人をはかるはあたるべからざる事

くらき人の、人をばかりて、其智をしれりと思はん、さらにあたるべからすつたなき人の碁うつ事はかりに、さとくたくみなるは、かしこき人の此藝におろかなるをみて、おのれが智におよばずとさだめてよろづ道のたくみ、我道を人のしらざるを見て、おのれすぐれたりと思はん事、大なるあやまりなるべし。文字の法師暗證の禪師たがひにはかりて、おのれにしかずと思へるともにあたらず。おのれが境界にあらざるものをは、あらそふべからず、是非すべからず。

（百十四）　十月を神無月といふ事

十月を神無月といひて、神事にはゞかるべきよしは、しるしたるものなし。本文も見えず。たゞし當月諸社のまつりなきゆゑに、此名あるか。此月よろづの神たち、太神宮へ、あつまりたまふといふ説あれとも、その本説なし。さる事ならは伊勢には、ことにまつりづきとすへきに其例もなし。

十月諸社の行幸其例もおほし。たゞしおほくは不吉の例なり。

（百十五）　牛放れてはまゆかの上にのぼりし話

德大寺右大臣殿、檢非違使のべつたうの時、中門にて使廳のひやうぢやう、おこなはれけるほとに、官人章兼が牛はなれて、廳のうちへ入て、大理の座の、はまゆかのうへにのぼりて、にれうちかみてふしたりけり。おもきけいなりとて、牛を陰陽師のもとへつかはすべきよし、おの〳〵まをしけるを、父の相國きゝたまひて、牛にふんべつなし、足あれはいつくへかのほらざらん。尪弱の官人、たま〳〵出仕の微牛をとらるべきやうなしとて、牛をはぬしにかへして、ふしたりけるたゝみをはかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。あやしみをみてあやしまざる時は、あやしみかへりてやふるといへり。

（百十六）　龜山殿の蛇の話

龜山殿たてられんとて、地をひかれけるに、大なるくちなは數もしらず、こりあつまりたる塚ありけり。此所の神なりといひて、ことのよしを申

ければ、いかゞあるべきと勅問ありけるに、ふる(古來)くより此地をしめ(占)たるものならば、さうなくほりすてられかたし、とみな人申されけるに、此(大)おと(臣)ゞ一人、國土にをらんむし、皇居をたてられんに、何のたゝりをかなすべき。鬼神はよこしまなし。とがむ(咎)べからず。只みなほりすつべしと申されたりければ、塚をくづしてくち(朽)なはをは、大井川にながしてけり。更にたゝりなかりけり。

（百十七）よふこ鳥の事

よふこ鳥は、春のものなりとはかりいひて、いかなるものともさたか(確)にしるせるものなし。ある眞言書の中に、よぶこ鳥なく時、招魂の法をはおこなふしだいあり。是は鶯なり萬葉集の長歌に、かすみたつなかき春日の、などつゝこけ(鳴)たり。鶯鳥も喚子鳥のこと(事)さま(樣)にかよひてきこゆ。

（百十八）萬の事頼むへからさる事

萬の事はたの(賴)むへからず。おろかなる人は、ふかくものをたのむゆゑに、うらみいかるることあり。いきほひありともたのむへからず、こは(强)きものまづほろぶ。財おほしとてたのむへからず、時のまにうしなひやすし。オありとてたのむへからず、孔子も時にあはず、德ありとてたのむへからず、顏回も不幸なりき。君の寵をもたのむへからず、誅をうくることすみやかなり。奴したがへりとてたのむへからず、そむきはしることあり。人のこゝろさしをもたのむへからず、かならずへんず。約をもたのむへからず、信あることすくなし。身をも人をも、たのまされは、ぜ(是)なる時はよろこび、非なる時はうらみず。左右ひろけれはさはらす。前後とほけれはふさ(塞)がらず。せはき時はひしけくだく。心を用ることすこしきにして、きびしきときは、物にさか(逆)へ、あらそひてやぶる。ゆるくしやはらかなる時は一毛損せず。人は天地の靈なり、天地はかぎるところなし。人の性なんぞことならん。寬大にしてきはまらさる時は。喜恕これにさはらずして、物のためにわづらはず。

（百十九）秋の月めでたき事

秋の月はかぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれ

とて思ひわかざらん人は、無下に心うかるべきことなり。

（百二十）　御前の火燼に火を置く時の心得

御前の火燼に火を置く時は、火はしにてはさむことなし。かはらけよりたゞちにうつすべし。されはところびをちぬやうに心得て、すみをつむべきなり。八幡の行幸に、御奉の人淨衣きて、手にて炭をさゝけれは、ある有識の人、白きものをきたる日は、火はしをもちゐるくるしからずと申されけり。

（百二十一）想夫戀といふ樂の事

想夫戀といふ樂は、女男をこふるゆゑの名にはあらず。もとは相府蓮、もじのかよへるなり。晉の王儉大臣として、家にはちすをうゑて愛せし時のがくなり。是より大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とてえびすのことばき國ありそのえびす漢に伏して後に來りて、おのれが國の樂を奏せしなり。

（百二十二）　平の宣時のむかしかたり

平の宣時朝臣、老の後むかしがたりに、最明寺入道。あるよひのまにはるゝことありしに、やかてと申ながら、ひたゝれのなくてとかくせし程に、またつかひ來りて、直垂などのさふらはぬにや、夜なれはことやうなりとも、とくとありしかは、なえたる直垂、うち〳〵のまゝにて、まかりたりしに、てうしにかはらけとりそへてもて出て、此酒をひとりたうべんが、さう〳〵しけれは申さつるなり。さかなこそなけれ、人はしづまりぬらん。さりぬへきものやある、といづくまてもゝとめ給へとありしかは、しそくさしてくま〳〵をもとめしほとに、だい所のたなにこかはらけに、みそのすこしつきたるを見いでて、これそもとめえられさうらふと申さしかは、事たりなんとて、心よくすこんにおよびて、興にいられはべりき。其世にはかくこそはべりしかと申されき。

（百二十三）　笛の五つの穴の事

四條黃門命ぜられていはく、龍秋は道にとりてはやんごとなきものなり。先日來りていはく、短慮のいたり、きわめてくわうりやうのことなれ

とも、横笛の五の穴は、いさゝかいぶかしき所のはべるか、とひそかに是を存ず。其のゆゑ干の穴は平調、五の穴は下無調なり。其間に勝絶調をへだてたり。上の穴雙調、つぎに鳧鐘調を置て、夕の穴黃鐘調なり。其次に黐鏡調をおきて、中の穴盤渉調、中と六とのあわひに、神仙調あり。かやうに間々に、みな一律をぬすめるに、五の穴のみ上の間に、調子をもたずして、しかもまをくはることひとしきゆゑに、其聲不快なり。されは此穴をふく時はかならずのく。のけあへぬ時は、ものにあはず。ふきうる人かたしと申さき。料簡のいたりまとに興あり。先達後生をおそるゝといふこと、此事なりとはべりき。他日に景茂が申はべりしは、笙はしらべおふせてもちたれは、たゝふくはかりなり。笛はふきなからいきのうちにてかつしらべもてゆくものなれは。穴ごとに口傳のうへに、性骨をくはへて。心をいるゝと、五の穴のみにかぎらず、ひとへにのくとはかりも定むべからす。あしくふけはいづれの穴もこゝろよからず、上手は何れをもふきあはす。呂律の物にかなはさるは人のとがなり。器の失にあらすと申き。

（百二十四）　天王寺の樂の事

何事も邊土は、いやしくかたくなゝれども、天王寺の舞樂のみ都にはちずといへは、天王寺の伶人の申はへりしは、當寺の樂はよく圖をしらへあはせて、物のねのめでたくとゝのほり侍ると、外よりもすぐれたるゆゑは、太子の御時の圖今に侍るをはかせとす、いはゆる六時堂のまへの鐘なり。そのこゑ黃鐘調のもなかなり。寒暑にしたがひて、あがりさがりあるべきゆゑに、二月のねはん會より、聖靈會までの中間を指南とす、祕藏の事なり。此一調子をもちて、いづれのこゑをも、とゝのへはべるなり、とまをしき。およそ鐘のこゑは黃鐘調なるべし。是無常の調子、祇園精舍の無常院のこゑなり。西園寺のかね、黃鐘調にいらるへしとて、あまたたびいかへられけれども、かなはざりけるを。遠國よりたづねいたされけり。淨金剛院の鐘のこゑ、また黃鐘調なり。

（百二十五）　すこしの地もいたつらにすべからざる事

陰陽師有宗入道、鎌倉よりのぼりて、尋ねまうで來りしが、まづさし入り

て、此庭のいたづらにひろきこと、淺ましくあるべからぬことなり。道をしるものは、うゑ(植)ることをつとむ。ほそ道一つのこして、みな畠につくり給へといさめはべりき。まことにすこしの地をも、いたづらにおかんとは、益なきことなり。食物、藥種、などうゑおくべし。

(百二十六) 白拍子のおとりの事

多久資が申けるは、通憲入道まひの手の中に、興あることゞもをえらびて、磯の禪師といひける女に、をしへてまはせ(舞)けり。白き水干に、さうまき(烏帽)をさゝせ。ゑぼうしを引きいれたりければ、をとこ(男)まひ(舞)とぞいひける。禪師がむすめしづかといひける、此藝をつげり、これ白拍子の根元なり。佛神の本縁をうたふ。其後源光行、おほくのことをつくれり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊にをしへさせたまひけるとぞ。

(百二十七) 五德冠者の事

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の譽れありけるが、樂府の御論義の番に召れて、七德のまひを二つわすれたりければ、五德冠者と異名をつきにけるを、心うき事にして、學問をすてゝ遁世したりけるを、慈鎭和尚、一藝あるものをは、下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、此信濃入道をふぢ(持)し給ひけり。此行長入道、平家物語をつくりて、生佛といひける盲目に、をしへてかたら(語)せけり。さて山門のことを、ことにゆゝしくかけり。九郎判官の事は、くはしくしりてかきのせたり。蒲冠者の事は、よくしらざりけるにや、おほくのことゞもをしるしもらせり。武士の事弓馬のわざは、生佛東國のもの(生)にて、ぶし(武士)にとひきゝてかゝせけり。かの生佛が生れつきのところゑを、今の琵琶法師はまなびたるなり。

(百二十八) 五條の大裡の妖怪の事

五條のたいりには、ばけもの(妖怪)のありけり。藤大納言殿かたられはべりしは、殿上人ども、黑戸にて碁をうちけるに、みすをかゝげて見るものあり。たれ(誰)ぞと見むきたれば、きつねの人のやうについゐて(突居)、さしのぞきたるを、あれきつねよとゞ(驚)よまれて、まどひにけり。みれん(未練)のきつねはけそんじけるにこそ。

（百二十九）　百日の鯉の事

園の別當入道は、さうなき庖丁者なり。ある人のもとにて、いみじき鯉をいだしたりければ、みな人、別當入道のはうてう（庖丁）を見はやと思へども、たやすくうちいでんも、いかゞとためらひけるを、別當入道さる（猶豫）人にて、此ほど百日の鯉をきりはへるを、今日かさはべるべきにあらず。まけて申うけんとてきられける。いみじくつぎ〳〵（相應）しく興ありて、人ども思へりける、とある人北山太政入道殿に、かたり申たりければ、かやうの事、おのれはよにうるさく覺ゆるなり、きりぬべき人なくはたべ（給）、きらんといひたらんは猶よかりなん、なんでう百日のことひをきらんぞ、とのたまひたりし。をかしくおぼえしと、人のかたり給ひけるいとをかし。大かたふるまひて興あるよりも、興なくてやすらかなるがまさりたることなり。まれ人の饗應なども、ついて（序）をかしきやうにとりなしたるも、まことによけれど。たゞ其事となくて、取りいでたるいとよし。人にものをとらせたるも、ついでなくて是を奉らんといひたるまことの志なり。をしむよし

ま（託）て、ことはれんと思ひ、勝負のまけわざに、ことつけなどしたるむづかし。」

（百三十）　萬の事恭く言少くすべき事

萬のことがあらじと思はゞ、何事にもまことありて人をわかず（別）、うやうやしく詞すくなからんにはしかじ。男女老少、みなさる人とそよけれども、ことにわかくかたち（容貌）よき人の、ことうるはしきは、忘れがたくおもひつかるゝものなり。よろづのことがは、なれたるさまに上手めき、所えたるけしきして、人をない（匿）がしろ（如）にするにあり。

（百三十一）　人の物問ひたる時の事

人のものをとひたるに、しらずしもあらじ。ありのまゝにいはんは、をこがましとにや、心まどはすやうに、かへり（返事）ごとしたるよからぬ事なり。さりたることとも、猶さだか（分明）にと思ひてやとふらん。又まことにしらぬ人も、などかなからん。うらゝかにいひきかせたらんは、おとなしくきこえなまし。人はいまだきゝおよばぬ事を、わがしりたるまゝに、さても其人の事のあさましき、などはかりいひやりたれば、いかなることとのあるにか、

と押しかへしとひにやるとそ心つきなけれ。世にふりぬることをも、おのづから聞きもらすあたりもあれは。おぼつかなからぬやうに、つけやりたちん、あしかるべきこととかかは。やうの事は物なれぬ人の、あることなり。

（百三十二） 虛空はよく物を入るゝ事

主ある家には、ずゝ（無端）ろなる人、心のまゝにいりくる事なし。あるしなき所には、道行人みたりに立入り、孤（孤）ふくろうやうのものも、人けに（紙）せ（壁）がれねは、所えかほに入すみ、こた（*結）まなといふけしからぬかたちも、あら（現）はるゝものなり。またかゞみには色形なきゆゑに、よろづのかけ來りてうつる。かゞみに色かたちあらましかは、うつらさらまし。こく（虛空）うよくものをいる。我らが心に、ねん〳〵のほしきまゝに來りうかぶも、心といふものゝなきにやあらん。心にぬしあらましかは、むねのうちにそこ（若）はくの（干）ことは、いりきたらさらまし。

（百三十三） 出雲大社のこまいぬの話

丹波に出雲といふ所あり。大社をうつしめでたく作れり。しだ（志太）の何かしとかやしる（知行）所なれは、秋比聖海上人其外も人あまたさそ（誘）ひて、いさ給へ、出雲をかみにかい（掘）もちいめ（飯）さんとて、ぐし（具）もて、いきたるに、各をかみてゆゝしく信おとしたり。御前なる獅子こま犬、こむ（背）きてうしろさまに立たりけれは、上人いみしくかんじて、あなめでたや、此しゝのたち（立様）やういとめづらし、ふかきゆゑ（理由）あらんと泪ぐみて、いかに殿はら殊勝の事は御らんしとがめすや、無下なりといへは、各あやしみてまことに他にことなりけり。都のつど（土産）にかたらんなといふに、上人なほゆかしがりて、おと（大人）なしく物しりぬべきかほしたる神官をよひて、此神社のゑし立てられやう、定てならひ（習慣）あるとにはべらん、承らはやといはれけれは、其とに候、さかなき（逆子）わら（童）はべとものの仕りける、奇怪に候ことなりとて、さしよりてすゑなほしていに（去）けれは。上人の感涙いたづらになりにけり。

八月十五日九月十三日は婁宿なり。此宿清明なるゆゑに月をもてあそぶに良夜とす。

（百三十四）兼好八の年の話

八になりし年、父にとふていはく、佛はいかなる物にか候らんといふ。ちがいはく、佛には人のなりたるなりと。又とふ、人は何として、佛にはなり候やらんと。父また佛のをしへによりて、なるなりとこたふ。又とふ、をしへ候ける佛をは、何をかをしへ候ける、と、又こたふ、それもまたさきの佛の、をしへによりてなり給ふなりと。又とふ、そのをしへはしめ候ける、第一の佛はいかなる佛にか候ける、といふ時、父空よりやふりけん、土よりやわきけん、といひてわふらふ。問つめられてえこたへすなり侍りつ、と諸人にかたりて興じき。

明治二十七年三月十日印刷
明治二十七年三月二十四日發行

訂正

版權所有

發行者　東京市小石川區大門町二十五番地　青山清吉（電話千二百六番）

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

賣捌人　東京市日本橋區通三丁目　林平次郎

東京市日本橋區濱町二丁目十四番地　長田致孝

定價金二十五錢

15
296

關東大賣捌書林

東京京橋區南傳馬町二丁目　吉川半七

關西大賣捌書林

大阪市南區心齋橋南二丁目　松村九兵衛

各府縣賣捌所

大阪久寶寺町　前川善兵衛
同備後町　吉岡平助
同備後町　梅原龜七
同北久太郎町　柳原喜兵衛
京都寺町通　若林書店
同新町通　便利堂
同三條通　大谷書店
同寺町通　梅原支店
熊本新二丁目　長崎二郎
神戸相生橋東　熊谷久榮堂
佐賀白山町　河内壯助
飛驒高山　桝屋重兵衛
岐阜米屋町　三浦源助
愛知名古屋本町　川瀨代助
同同　片野東四郎
靜岡新通一丁目　勝見儀助
石川金澤　近田太三郎

新潟新潟市　林富吉
同長岡　目黑十郎
長野善光寺前　西澤喜太郎
同小諸　小山佐傳治
山梨甲府八日町　五明堂
群馬前橋本町　煥乎堂
宮城仙臺國分町　金港堂
岩手盛岡中橋通　便益堂
山形八日町　五十嵐太右衛門
秋田大町　本間金之助
北海道函館　魁文社
福島福島町　萱間左右太
栃木宇都宮町　正々堂
茨城水戸上市泉町　川又銀藏
同古河町　高木文正堂
千葉佐原　朝野利兵衛
同東金　多田屋書店

15
296